四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 56

一般国道1号北勢バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ

横谷遺跡

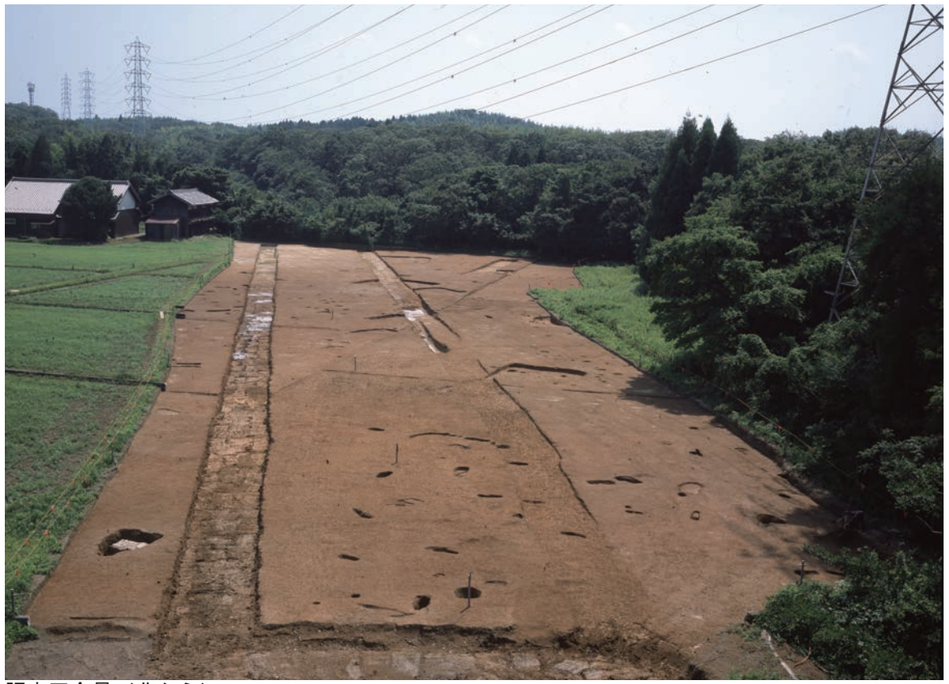
2021年（令和３年）
四日市市教育委員会

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書56

横谷遺跡

二〇二一年（令和三年）

四日市市教育委員会



調査区全景（北から）

調査区南部竪穴住居・堀立柱建物（南東から）

例言

1　本書は、四日市市が国土交通省中部地方整備局から委託を受けた、一般国道１号北勢バイパス道路建設予定地にかかる横谷遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の負担による。

3　現地調査および整理作業は、下記の体制で行った。
・調査主体　四日市市教育委員会
・調査担当　四日市市教育委員会社会教育課（平成 31 年度以降は社会教育・文化財課）
平成 27 年度：主幹　清水政宏　　嘱託　山本達也
平成 29 年度：主幹　清水政宏　　嘱託　山本達也
平成 30 年度：主幹　清水政宏　　嘱託　山本達也
平成 31（令和元）年度：主幹　清水政宏　　嘱託　山本達也
令和２年度：主幹　清水政宏　　会計年度任用職員（フルタイム）　山本達也
・土工委託　株式会社イビソク

4　報告書の作成業務は平成 29 ～ 31 年度及び令和２年度に四日市市教育委員会社会教育・文化財課が行い、執筆・編集は山本達也が行った。

5　報告書の作成にあたり、伊藤加奈子・石崎恵美・後藤禅香・萩原なぎさ・松崎由里・北野節子・鈴木美和子ほか多数の協力を得た。

6　遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を用いた。

7　本書に使用した遺構表示記号は、下記のとおりである。
SH: 竪穴住居　　SB: 掘立柱建物　　SK：土坑　　SD：溝

8　本書で表記する色調は、農林水産省水産技術会事務局監修及び財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』（2002 年版）に準拠した。

9　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、四日市市教育委員会が保管している。

本文目次

Ⅰ　前言
　１．事業の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　２．調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・1
　３．文化財保護法等にかかる諸手続き・・・・・・2
Ⅱ　位置と環境
　１．地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　２．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
Ⅲ　調査の成果
　１．調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　２．基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
　３．遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
　４．遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
Ⅳ　結語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

挿図目次

第１図　北勢バイパス建設予定地内(四日市市)遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第２図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第３図　横谷遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・7
第４図　横谷遺跡一次調査区配置図・・・・・・・・10
第５図　横谷遺跡二次調査区配置図・・・・・・・・11
第６図　横谷遺跡遺構配置図・・・・・・・・・・・12
第７図　調査区東壁断面図１・・・・・・・・・・・13
第８図　調査区東壁断面図２・・・・・・・・・・・14
第９図　調査区南壁断面図・・・・・・・・・・・・15
第10図　SH1・SD12・SK10・SK14・SK15平面・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第11図　SH2・SB7・SB8平面・断面図・・・・・・18
第12図　SH3・SH4・SK22・SK23・SD24・SB25平面・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第13図　SH5・SH6・SK10・SH28平面・断面図・・・20
第14図　SH29・SK34・SH30・SK36・SK31・SK35平面・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第15図　SK11・SK17・SK18・SK19・SK21・SK26・SK27・SK37・SK38・SD32平面・断面図・・・・・23
第16図　遺物実測図　①・・・・・・・・・・・・・・25
第17図　遺物実測図　②・・・・・・・・・・・・・・26
第18図　横谷遺跡周辺遺跡位置図・・・・・・・・29

挿表目次

第１表　北勢バイパス建設予定地内(四日市市)遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第２表　遺物観察表・・・・・・・・・・・・27-28
第３表　竪穴住居観察表・・・・・・・・・・・・28
第４表　掘立柱建物観察表・・・・・・・・・・28
第５表　土坑観察表・・・・・・・・・・・・・・28
第６表　溝観察表・・・・・・・・・・・・・・・28
第７表　各遺構別石器石材数量表・・・・・・28

写真図版

巻頭図版　調査区全景
調査区南部竪穴住居・掘立柱建物
図版１　ＳＨ１全景
図版２　ＳＨ２全景、ＳＨ３全景
図版３　ＳＨ５全景、ＳＨ６全景
図版４　ＳＨ２８全景、ＳＨ２９全景
図版５　ＳＨ３０全景
図版６　ＳＢ７全景、ＳＢ８全景
図版７　ＳＢ２５全景、ＳＫ３１・ＳＫ３５全景
図版８　ＳＫ２７遺物出土状況、ＳＫ３８全景
図版９　調査区南部全景、調査区中央部遺構群
図版10　出土遺物

Ⅰ　前言

１．事業の概要

一般国道１号北勢バイパスの計画は、三重郡川越町南福崎の国道 23 号を起点として朝日町、四日市市内を経て、鈴鹿市稲生町の中勢バイパスに接続する、全長 28.4km の幹線道路である。現在、三重県北部の幹線道路である国道１号及び 23 号は、四日市市の中心市街地で慢性的な交通渋滞が発生している。また内陸部でも住宅開発等により交通量が増大し、生活道路等の交通混雑が各所で発生している状況である。

このため、北勢バイパスは四日市市を中心とした北勢地域の内陸部を環状にバイパスし、臨海部の国道１号及び 23 号に集中する自動車交通を適切に分散して交通混雑の緩和、道路交通の安全を図ると共に、内陸部の地域開発の促進など、当地域の経済の発展に寄与することも期待されている。

２．調査に至る経過

北勢バイパスの路線内における埋蔵文化財については、昭和 63 年度に三重県教育委員会が分布調査を実施した。その結果をもとに建設省中部地方整備局（現国土交通省中部地方整備局）と埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、現状保存が困難な遺跡は事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった（第１図・第１表）。

調査主体は当初、三重県教育委員会が行う計画であったが、四日市市内の遺跡については建設省（現国土交通省）・三重県教育委員会・四日市市教育委員会が協議を重ねた結果、四日市市教育委員会が調査を受託することとなった。

横谷遺跡は北勢バイパス計画以前から知られており、石鏃・弥生土器が出土する遺跡とされていた（第２図）。北勢バイパスの建設工事に先立ち、平成 27 年８月 17 日から９月７日にかけて事業地内にかかる約 8,000 ㎡を対象として一次調査を実施した。調査は、２ｍ幅のトレンチ９本を設定して行い、トレンチ面積の合計は 800 ㎡であった（第４図）。

調査の結果、事業地の遺跡範囲にかかる部分のうち、南部において竪穴住居や土坑、溝などの遺構の検出、および遺物として土師器を確認し、4,170 ㎡を要二次調査範囲と判断した。これを受けて平成 29 年度に二次調査を行った。

なお、本調査区の西側には送電鉄塔があり、北勢バイパス建設に際してはこの移設工事も行われることになった。鉄塔新設予定地も横谷遺跡の範囲内であったことから、平成 31 年度に第２次発掘調査を行い、今回報告する第１次調査で検出した遺構に連続する部分を確認している。

調査日誌

５月 16 日（火）曇り	表土掘削開始
５月 17 日（水）薄曇り	表土掘削継続
５月 18 日（木）快晴	表土掘削継続・小地区設定
５月 19 日（金）快晴	表土掘削継続・竪穴住居検出
５月 22 日（月）快晴	表土掘削継続・竪穴住居検出
５月 23 日（火）晴れ	南部表土掘削完了・段階確認
５月 24 日（水）曇り	ベルコン設置、現場養生等
５月 25 日（木）雨	雨天作業なし
５月 26 日（金）曇り	包含層掘削・検出作業
５月 29 日（月）快晴	包含層掘削・検出作業
５月 30 日（火）晴後曇り	包含層掘削作業南部完了
５月 31 日（水）曇り	ＳＨ１・３・４他掘削開始
６月１日（木）曇り	北部西半表土掘削着手　SH1・5・6掘削
６月２日（金）晴れ	北部西半表土掘削　写真撮影、SH5・7掘削
６月５日（月）晴れ	写真撮影、ＳＨ１・２掘削
６月７日（水）雨	雨天作業なし
６月８日（木）雨後曇り	排水作業
６月９日（金）晴れ	ＳＨ１・３・４他掘削
６月 12 日（月）快晴	写真撮影、ＳＨ３・４他掘削
６月 13 日（火）快晴	ＳＨ２・３・４他掘削
６月 14 日（水）快晴	写真撮影、ＳＨ３・４他掘削
６月 15 日（木）快晴	写真撮影、ＳＨ３・４他掘削
６月 16 日（金）晴れ	ＳＨ１・２・３他掘削
６月 19 日（月）快晴	ＳＨ１・２・３・28・29 掘削
６月 20 日（火）曇り	ＳＨ１・２・28・29 他掘削
６月 21 日（水）雨	雨天作業なし、現説準備

６月22日(木)薄曇り　　ＳＨ28・29・30他掘削
６月23日(金)快晴　　写真撮影、ＳＨ30他掘削
６月26日(月)曇り　　写真撮影、ＳＨ30他掘削
６月27日(火)曇り　　SH28実測、北東部表土掘削
６月28日(水)雨後晴れ　北東部表土掘削
６月29日(木)曇後晴れ　北東部表土掘削
７月３日(月)晴れ　　北東部表土掘削段階確認
７月４日(火)晴れ後雨　雨天作業なし
７月５日(水) 雨後晴れ　午後から検出作業
７月６日(木)晴れ　　段階確認、検出作業
７月７日(金)快晴　　ＳＨ30掘削、検出作業
７月10日(月)曇り　　ＳＨ30掘削、検出作業
７月11日(火)曇り後晴れ　写真撮影、ＳＨ30掘削
７月12日(水)曇り　　ＳＨ30掘削
７月13日(木)晴れ　　ＳＨ30・SK40・SK38掘削
７月14日(金) 曇り時々晴れ　ＳＨ30・SK38写真撮影
７月18日(火)快晴　　SK27・29・35・SH1掘削取上
７月19日(水)快晴　　SD12・SH3取上、写真撮影
７月20日(木)快晴　　遺構掘削、SH1・SH3写真撮影
７月21日(金)晴れ　　作業無し
７月25日(火)晴れ　　遺構清掃、写真撮影
７月26日(水)曇後晴れ　排水作業
７月27日(木)曇り　　排水・清掃作業
７月28日(金)曇り　　排水作業
７月31日(月)曇り　　写真撮影
８月１日(火)曇り　　作業無し
８月２日(水)曇り　　現地説明会のための清掃
８月３日(木)曇り　　排水・清掃作業
８月４日(金)曇り　　現地説明会準備
８月５日(土)晴れ　　現地説明会、参加者60名
８月７日(月)雨　　作業無し
８月８日(火)晴れ　　段階確認準備、排水作業
８月10日(木)晴れ　　段階確認　現地作業終了
８月31日(木)晴れ　　埋め戻し完了

３．文化財保護法等にかかる諸手続き

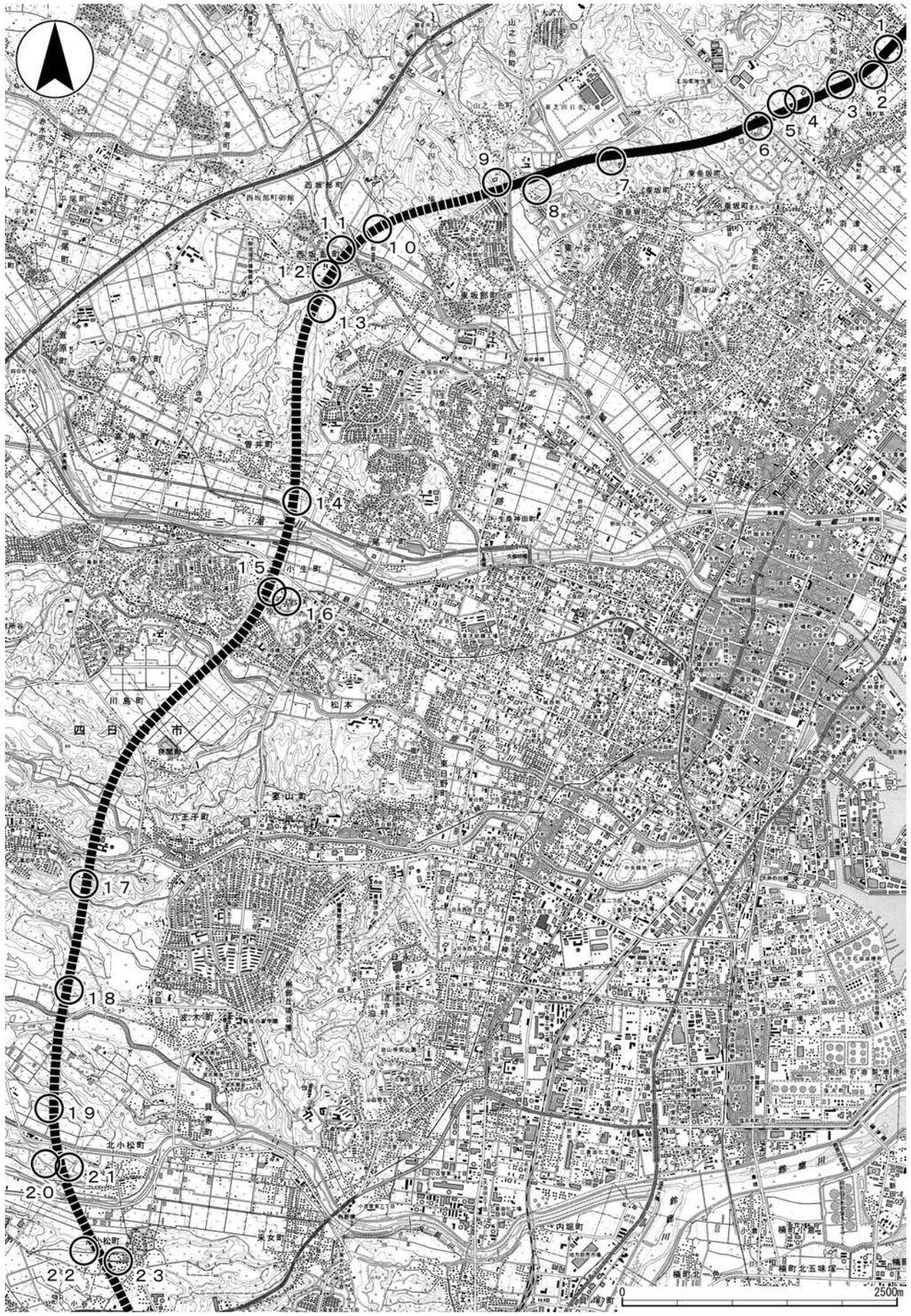
文化財保護法（以下「法」）等に係る諸手続きは、以下により行っている。

・法第 94 条第１項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（国土交通省通知、県教育長宛）
平成 22 年９月 29 日付け、社会第 550 号 -2

・法第 99 条第１項「埋蔵文化財発掘調査の報告について」（市教育長報告、県教育長宛）
平成 29 年５月 22 日付け、社会第 84 号

・遺失物法第１条第１項「埋蔵文化財発見届」（市教育長届出、四日市北警察署長宛）
平成 29 年 11 月 28 日付け、社会第 84 号 -7

・三重県文化財保護条例第 50 条第３項「出土品譲与申請」（市教育長申請、県教育長宛）
平成 31 年２月５日付け、社会第 91 号



第１図　北勢バイパス建設予定地内（四日市市）遺跡位置図（1:50,000）［国土地理院 桑名・四日市より］

	No.	遺　跡　名	遺跡番号	調査	所 在 地	時　期	遺　物（発掘調査・分布調査含む）
第1工区	1	四方天（しほうてん）遺跡	496	終了	大矢知町	古墳～鎌倉	灰釉陶器・山茶椀・土師器
	2	四反田（したんだ）遺跡	497	終了	大矢知町	古墳～鎌倉	土師器・須恵器・山茶椀
	3	久留倍（くるべ）遺跡	74	終了	大矢知町	弥生～室町	弥生土器・石斧・須恵器・山茶椀
	4	北之脇（きたのわき）遺跡	405	終了	大矢知町	古　墳	土師器・須恵器
	5	羽津広（はづひろ）遺跡	336	終了	大矢知町	弥　生	弥生土器
	6	山奥（やまおく）遺跡	84	終了	大字羽津	弥生～古墳	弥生土器・須恵器
第2工区	7	寺坊谷（てらぼうだに）古墳群	82･83	終了	垂 坂 町	古　墳	須恵器
	8	名戸谷口（なとたにぐち）古窯跡	352	終了	山之一色町	古　墳	須恵器・灰原
	9	荒井田（あらいだ）遺跡	121	終了	山之一色町	弥　生	弥生土器
	10	川原宮（かわらみや）遺跡	498	終了	西坂部町	古墳～	土師器・須恵器・山茶椀
	11	川向山添（かわむかいやまぞえ）遺跡	347	終了	西坂部町	古　墳	土師器・須恵器
	12	江田川（えだがわ）遺跡	259	終了	西坂部町	古　墳	土師器・須恵器・灰釉陶器
	13	横谷（よこだに）遺跡	120	終了	西坂部町	弥　生	石鏃・土師器・須恵器
	14	東門田（ひがしもんでん）遺跡	499	終了	曽 井 町	古墳～	須恵器
第3工区	15	小生（こも）遺跡	282	未	小 生 町	古墳～	土師器・須恵器(表採)
	16	生泉（しょうず）遺跡	149	未	小 生 町	古墳～	土師器・須恵器・山茶椀(表採)
	17	里前（さとまえ）遺跡	421	未	八王子町	弥生～	弥生土器・土師器(表採)
	18	辻の下（つじのした）遺跡	500	未	波 木 町	古墳～	須恵器(表採)
	19	菖蒲谷（しょうぶだに）遺跡	569	未	北小松町	古墳～	須恵器・土師器表採)
	20	山添（やまぞえ）遺跡	301	未	北小松町	古墳～	土師器・須恵器・山茶椀(表採)
	21	道堰（どうぜき）遺跡	209	未	北小松町	古墳～	須恵器(表採)
	22	水ノ角（みずのすみ）遺跡	383	未	南小松町	弥生～古墳	弥生土器・須恵器(表採)
	23	大垣外（おおがいと）遺跡	450	未	南小松町	弥生～室町	弥生土器・土師器・須恵器・埴輪(表採)
		(大垣外古墳群を含む)					

第１表　北勢バイパス建設予定地内（四日市市）遺跡一覧表

Ⅱ　位置と環境

１．地理的環境

横谷遺跡は、四日市市西部の西坂部町に所在し、江田川右岸の丘陵北端に立地する。

市域を流れる河川は、鈴鹿山脈に源を発し、東流して伊勢湾に注ぐ。

市内では、東部の海岸平野を東海道が南北に通っている。途中の日永追分で参宮道が分岐し、伊勢神宮へ向かう。伊勢湾に面する湊からは、対岸の三河や美濃に通じ、外海へ出て東国とも交易が行われた。鈴鹿山脈の八風越えや千種越えによって、近江を通る東山道と繋がり、京と東国を結ぶ交通の要衝となっている。

２．歴史的環境

横谷遺跡（１）とその周辺の歴史的な経過を、通観してみたい。なお、文章中の番号は第２図の番号に対応している。

旧石器時代

四日市市周辺では、ナイフ型石器の出土する遺跡がいくつか知られている。内部川・鎌谷川流域に属する内戸谷Ｂ遺跡や宮蔵遺跡などの市域南部のグループと、朝明川流域の久留倍遺跡（２）及び、削器・剥片のみの発見であるが当時代に属する可能性がある野呂田遺跡（３）などを含む市域北部のグループである。横谷遺跡近隣では旧石器の出土は確認されていない。

縄文時代

縄文時代草創期に属するものとしては東北山Ａ遺跡（４）など、有舌尖頭器が出土した遺跡が鈴鹿山麓扇状地の台地上で多数確認されている。早期の遺跡は、中野山遺跡（５ ）で縄文早期の煙道付炉穴が多数検出されたほか、内部川流域の一色山遺跡で押型文土器が出土している。このほかに発掘調査で遺構が確認されている例を挙げると、東日野遺跡（６）や小牧南遺跡（７）で竪穴住居が、西ヶ広遺跡（８）で縄文中期後葉の土坑とその中から深鉢が、志知南浦遺跡（９）や土丹遺跡（10）といった沖積地で縄文晩期の突帯文土器が、伊坂遺跡（11）で狩猟用の陥し穴が検出されており、徐々にではあるが様相も明らかになりつつある。

弥生時代

弥生時代になると、まず前期には海蔵川と三滝川に挟まれた生桑丘陵上に、いずれも多重環濠をもつ大谷遺跡（12）、永井遺跡（13）などの集落が営まれる。中期ないし後期に入ると大谷遺跡、永井遺跡も継続して営まれるが、そのほかの地域でも遺跡数が飛躍的に増加し、海岸部から内陸部に広く分布が見られるようになる。

久留倍遺跡では中期から後期にかけての竪穴住居のほか、方形周溝墓が確認され、流路からは多くの土器・木製品が出土した。特に後期になると遺構数が飛躍的に増加する。これと時期を同じくして、久留倍遺跡南西の丘陵上に立地する山奥遺跡（14）で県下有数の大規模な集落が営まれる。土製模造鏡や多数の鉄製品などの遺物があり、注目される。このほか中野山遺跡でも集落が確認されている。菟上遺跡（15）では中期後葉に大規模な集落が形成される。後期になると菟上遺跡と一つ西側に谷を隔てた西ヶ広遺跡が中心的集落となる。一方で東側の丘陵頂部に営まれた金塚遺跡（16）では環濠を持つ高地性集落が営まれ、山村遺跡（17）でも環濠が確認されている。低地部では、辻子遺跡（18）で中期後葉から後期の集落及び水田が確認されている。墓域としては、久留倍遺跡及びこれに隣接する大矢知山畑遺跡（19）で方形周溝墓が検出されたほか、山村遺跡でも方形周溝墓が 20 基検出されている。他に菟上遺跡や広永城跡（20）、間ノ田遺跡（21）でも方形周溝墓が確認されている。この他、金塚遺跡では綾杉文を有する銅鐸破片が、伊坂遺跡では江戸時代に扁平鈕式袈裟襷文銅鐸が出土している。

南方の海蔵川北岸の上野遺跡（22）でも中期後葉の集落跡と方形周溝墓が確認されている。

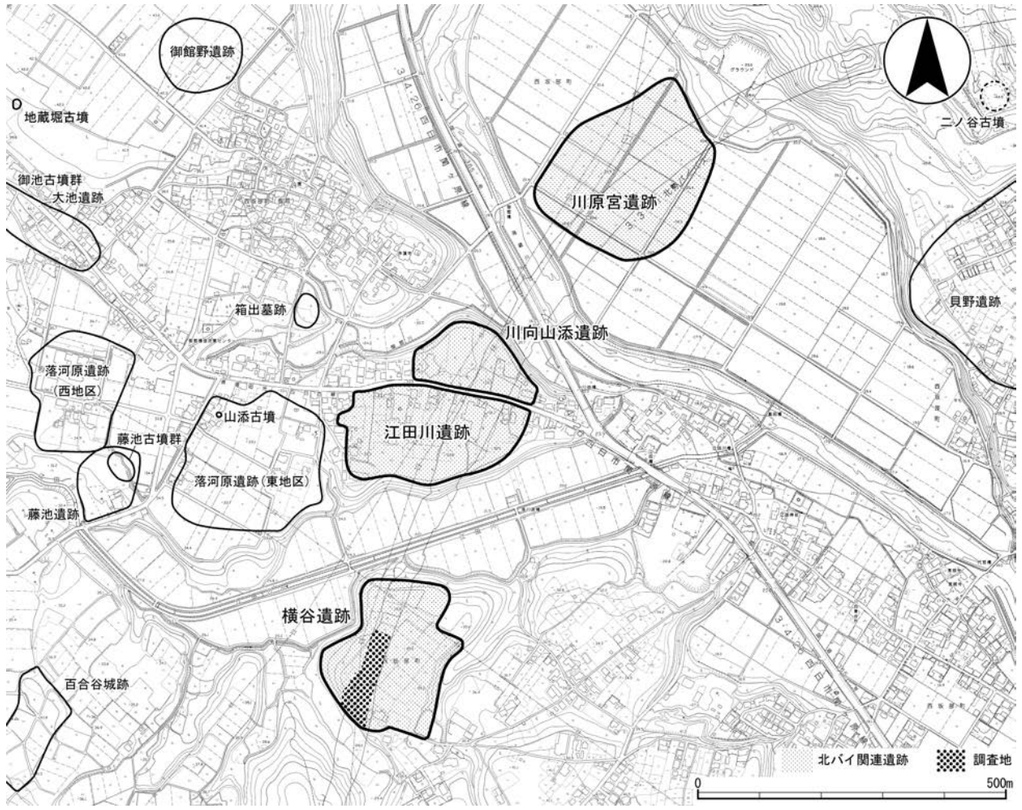
横谷遺跡の近傍では弥生時代の遺跡は見られず、後述するように本遺跡で弥生土器の出土が記録はされているものの、発掘調査では確認されていない。

第２図　遺跡位置図（1:50,000）［国土地理院　1:25,000　桑名・菰野・四日市東部・四日市西部　より］

古墳時代に入ると、久留倍遺跡や上野遺跡でまとまった集落が見られるようになる。また、海岸に近い茂福城跡（24）の下層で確認された里之内遺跡ではＳ字状口縁台付甕が出土しており、この時期に海岸低地への進出が始まったものと見られる。周辺の前期古墳は、内行花文鏡や車輪石・勾玉などが出土した志氐神社古墳（25）があるほか、員弁川水系では三角縁神獣鏡が出土した可能性がある桑名市の高塚山古墳が見られる程度である。しかし、菟上遺跡では滑石製合子型石製品の蓋が出土し、伊坂遺跡では勾玉や管玉が出土していることから、他にも消滅した古墳が存在した可能性もある。中期古墳としては、方墳を主体とする広古墳群（26）や、その東側にあって同じく方墳の可能性が指摘されている浄ヶ坊古墳群（27）がある。後期に入ると、遺跡数が爆発的に増加する。中野山遺跡では前期から続いて集落が営まれる。垂坂丘陵東部地域では、一旦断絶していた山奥遺跡で再び集落が営まれるようになる。海蔵川流域では、江田川遺跡（23）のほか、川向山添遺跡（29）、御館野遺跡（30）でも後期の集落が確認されている。

古墳は、特に７世紀以降に小規模な群集墳が多く築造される。筆ヶ崎古墳群（31）や八幡古墳（32）、御池古墳群（33）のように横穴式石室を主体とする古墳がある一方、死人谷横穴墓群（34）や金塚横穴墓群（35）、広永横穴墓群（36）、菟上遺跡のように横穴墓も多数見られ、その導入の背景が注目される。また、北山Ｃ遺跡（69）では多数の方墳からなる大規模な群集墳が確認されている。このほか、所属時期は明確ではないが、鈴木敏雄氏の記録によれば御池古墳群の東に続く丘陵上に「大塚」と称される前方後円墳が１基存在したことが伝えられる。

生産遺跡としては垂坂丘陵や朝日丘陵周辺に、まず５世紀後半に小杉大谷窯跡（37）が築かれ、その後、伊坂窯跡（38）、北ノ山古窯跡（39）、西ヶ



第３図　横谷遺跡位置図（1:10,000）

谷古窯跡（40）、名戸谷口古窯跡（41）、垂坂古窯跡（42）、鳩浦古窯跡（43）など古墳時代中期から奈良時代にかけて須恵器窯が築かれた。西ヶ谷古窯跡に隣接する西ヶ谷遺跡（44）は、出土遺物からその生産活動に関わっていた集落と考えられる。土師器焼成坑については、山奥遺跡や西ヶ谷遺跡、落河原遺跡（45）、久留倍遺跡で確認されている。

飛鳥～奈良時代

横谷遺跡の所在する坂部町は、『倭名類聚鈔（和名抄）』に見える、古代三重郡の刑部郷に相当すると考えられている。刑部郷内に属すると考えられる当該期の主要遺跡は、貝野遺跡（46）、江田川遺跡、落河原遺跡、上ヶ谷遺跡（47）などがある。特に貝野遺跡では、やや整然さを欠くが、古代の掘立柱建物が多数検出されているほか、暗文土師器がまとまって出土しており、遺跡の規模から考えても郷内の中心的な集落であったと考えられる。落河原遺跡では石帯が出土しており、官人の存在をうかがわせる。

また、近隣の朝明川流域を中心とする古代朝明郡に関わると思われる発掘調査成果が近年相次いでおり、今後の研究に大きな期待が持たれる。久留倍遺跡では東向きの正殿や八脚門等政庁の施設、大規模な東西棟の掘立柱建物等が検出された。また溝で方形に区画された内側に整然と並ぶ総柱建物が確認され、朝明郡の正倉院跡と推測されている。一方、西ヶ広遺跡で確認された、奈良時代に計画的に配置された大型の掘立柱建物建物群は、官衙に関連する可能性が高い建物群である。谷を隔てた丘陵上に広がる菟上遺跡では、西ヶ広遺跡より古い掘立柱建物群が見つかっている。このほか、宮の西遺跡（48）では石帯や木簡が、落河原遺跡や前山遺跡（49）で石帯が出土している。対して、山村遺跡、中村遺跡（50）、貝野遺跡などはこの時期の一般的な集落と思われる遺跡である。久留倍遺跡東方の下之宮遺跡（51）、下之宮南遺跡（52）は、低地部の集落遺跡と考えられる。中野山遺跡や筆ヶ崎古墳群の周辺では、多くの建物跡が見つかり、筆ヶ崎古墳群では鉄器加工に関係する遺構や遺物が検出されていることから、当地の古代郷名である大鐘郷との関係が考えられる。

古代三重郡で確認されている古代の寺院としては、智積町の智積廃寺（53）がある。昭和 41 年の発掘調査で金堂、講堂、僧坊が確認されている。瓦は、川原寺式のものが含まれ、寺方町の北浦古窯跡群（54）から供給を受けたと考えられている。さらに広域に目を向けると、塔心礎から唐三彩の蓋をもつ舎利容器が出土した朝日町の縄生廃寺があり、また桑名市の額田廃寺（55）では飛鳥川原寺と同笵の軒丸瓦が出土している。西ヶ谷遺跡や伊坂遺跡ではまとまった量の瓦が出土し、前者は小規模な堂の存在が、後者は瓦窯の存在が想定される。そのほか、上ヶ谷遺跡では布目瓦が集中して散布する一角があり、その性格が注目される。

平安時代

平安前期には久留倍遺跡で引き続き正倉が建てられている。近接する大矢知山畑遺跡は豊富な緑釉陶器などの出土遺物から有力者の居館か寺院関連の遺跡とみられる。当時、当地域に大きな影響を及ぼしたと思われるのは、10 世紀前葉に建立され現在も信仰を集める垂坂山観音寺（58）である。大膳寺（56）もその末寺の一つと伝わり、発掘調査で土馬や大量の瓦が出土しているが、遺物の時期は観音寺建立より古い。この近隣にある大谷瓦窯跡（57）は、大膳寺へ瓦を供給した瓦窯である。上野遺跡では人名の墨書灰釉陶器が出土し、注目される。

中世

律令的支配体制の崩壊に伴い、北勢地方の員弁郡・三重郡・朝明郡の三郡は相次いで伊勢神宮に寄進されて神郡となり、神宮の荘園である御薗・御厨・納所がたてられた。これらの荘園と関わりがあると考えられる遺跡としては、宮ノ西遺跡がある。これは古代から続く遺跡で、出土した木簡から古代柴田郷の一部であることが知られるが、墨書土器をはじめとする中世の遺物も豊富に出土しており、近隣の芝田遺跡（59）・小判田遺跡（60）などとともに当地周辺に比定される飯倉御厨の一角と考えられる。辻子遺跡は、多数の墨書土器や灰釉陶器などの出土遺物から、古代末期に朝明郡が神宮に寄進された後にこの周辺に所在した弘永御厨の中心域と推定されている。久留倍遺跡では中世の遺構・遺物も多く、掘立柱建物、井戸、溝、区画溝を伴う塚墓、火葬墓等を確認した。菟上遺跡では中世前期の集落と中世後期の大火葬墓群が見つかった。上野遺跡は区画溝と掘立柱建物が確認され、貴重な中世の集落資料となっている。川原宮遺跡（28）では、低地部における小集落とともに地震痕跡も確認されている。

城館について見ると、本遺跡周辺には 1204 年の三日平氏の乱に関係すると見られる高角城跡（61）、曽井城跡（62）があるが、いずれも明確な遺構は見られない。ほかに、百合谷城跡（63）、平尾城跡（64）、坂部城跡（65）がある。このうち、平尾城跡は 1993 年に発掘調査が行われている。さらに平野部に目を向けると茂福城跡、浜田城跡（66）、赤堀城跡（67）がある。これらは地割や現存遺構から縄張りの復元が試みられており、赤堀城跡は現在までに５次にわたる発掘調査が行われ、土塁などの遺構が検出されている。伊坂城跡（68）は、近年の発掘調査で防御性の高い縄張りや礎石を有する巨大な櫓門が検出され、16 世紀代の当地域における城づくりの最高到達点と評価されている。

【参考文献】

●四日市市

『四日市市史　第一巻　史料編　自然』1990

『四日市市史　第二巻　史料編　考古Ⅰ』1988

『四日市市史　第三巻　史料編　考古Ⅱ』1993

『四日市市史　第七巻　史料編　古代・中世』1991

●四日市市教育委員会

『大谷遺跡発掘調査報告－Ａ地区、Ｂ地区－』1966

『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ－Ｃ地区の遺構－』1976

『大谷遺跡発掘調査報告Ⅲ－Ｃ地区の遺物－』1977

『北山遺跡試掘調査概要』1975

『西ヶ広遺跡発掘調査報告－Ｄ地区－』1972

『永井遺跡発掘調査報告』1973

『四日市の後期古墳』1973

『大膳寺跡』1978・1979・1980・1981・1982

『西ヶ谷遺跡３』2002、『西ヶ谷遺跡４』2002、『西ヶ谷遺跡５』2005

『大矢知山畑遺跡』2002

『山奥遺跡Ⅰ』2003、『山奥遺跡Ⅱ』2004

『一般国道１号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』2006

『久留倍遺跡　５』2013

『久留倍遺跡　６』2013

『川原宮遺跡』2015

●四日市市遺跡調査会

『上野遺跡』1991、『上野遺跡２』1992

『西ヶ谷遺跡』1996

●朝日町教育委員会

『縄生廃寺跡発掘調査報告』1988

●朝日町

『みえあさひ文化財マップ』1999

●三重県文化財連盟

『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970

●三重県埋蔵文化財センター

『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』2002

『研究紀要』第 13 号 2003

『伊坂城跡発掘調査報告』2003

『伊坂遺跡発掘調査報告』2004

『山村遺跡（第２次）発掘調査報告』2004

『辻子遺跡発掘調査報告』2004

『間ノ田遺跡・辻子遺跡（第４次）発掘調査報告』2005

『菟上遺跡発掘調査報告』2005

『広永横穴墓群・広永１号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告』2006

『西ヶ広遺跡（第３・４次）発掘調査報告』2006

『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008

『中野山遺跡（第２・３・６・７次）発掘調査報告』2016

『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第４・５・７次）発掘調査報告』2019

『北山Ｃ遺跡（第２～７次）・西山古墳群　発掘調査報告』2020

『北山城跡第３次発掘調査　現地説明会資料』2013

『北山城跡第４次発掘調査　現地説明会資料』2014

●その他

鈴木敏雄『三重県三重郡三重村考古誌考』1942

Ⅲ．調査の成果

１．調査の方法

（１）調査区の設定

調査区は、平成 27 年度に実施した一次調査（ 第４図 ）の結果、要二次調査範囲とされた北勢バイパス用地にかかる遺跡範囲の中央部から南部にかけて設定した（第５図）。

（２）小地区の設定

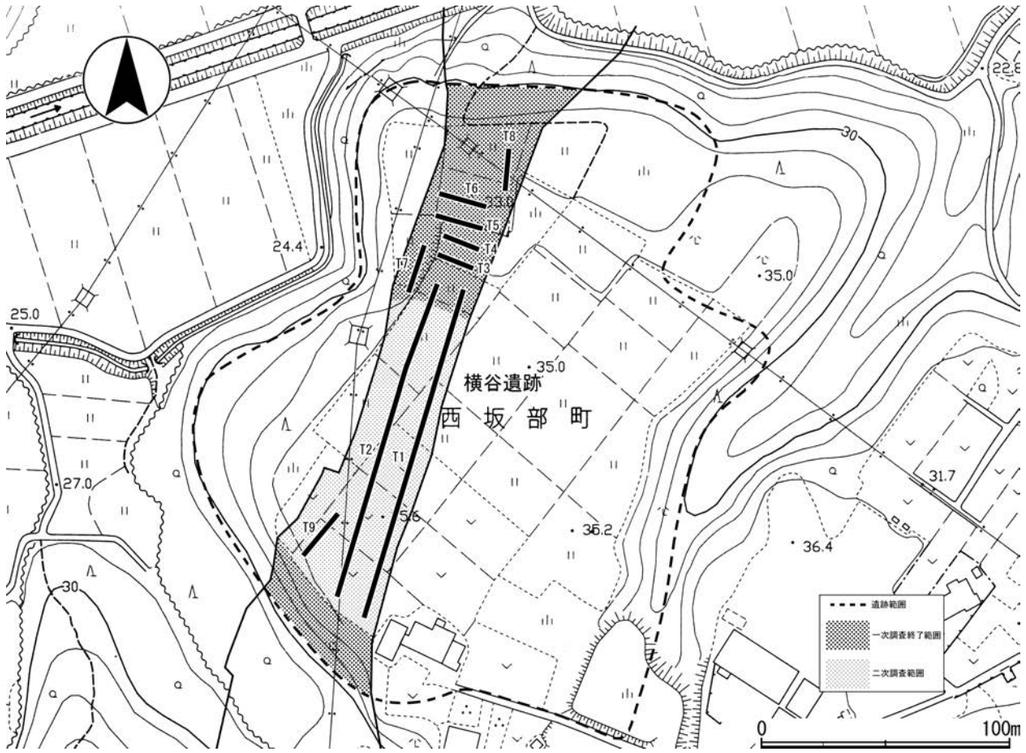
調査区の設定後、調査区全体にわたって国土座標に合わせた４ｍ四方の小地区を設定した。各小地区には、東から西へ向かってＡから順にアルファベットを、北から南へ向かって１から順に数字を付与し、このアルファベットと数字の組み合わせにより各小地区を示した。遺構検出段階における遺物の出土位置の記録は、小地区ごとに行った。

（３）掘削

現地調査での掘削作業については、まず表土を重機で除去した。その後、人力により包含層掘削と遺構検出作業を行い、検出した各遺構をさらに人力で掘削した。これらの作業は調査区が南北に長いことから土砂搬出の都合上、南部から北部へと段階的に進めた。

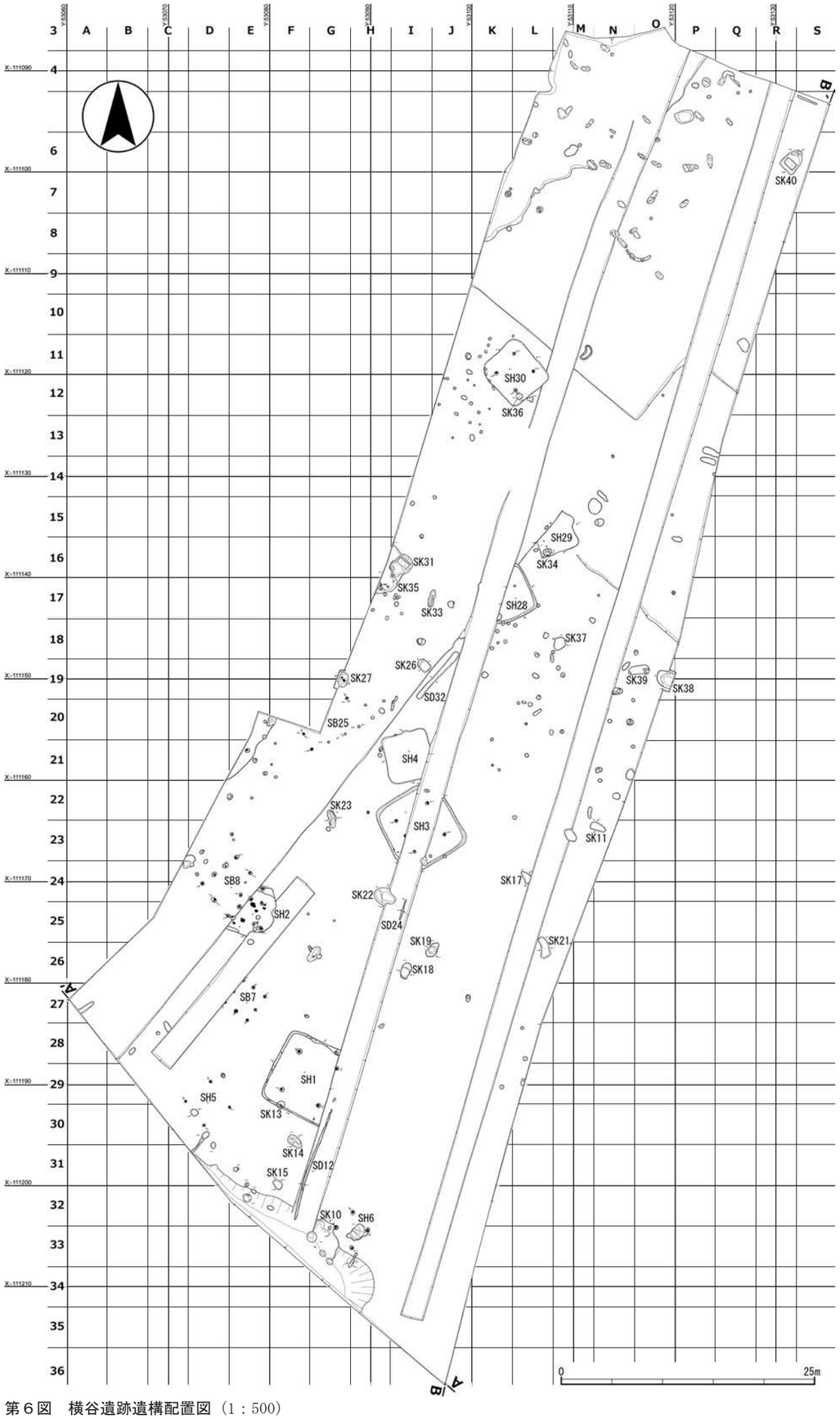
（４）遺構番号の付与

遺構番号は、ピット以外の遺構は全て通し番号とし、表記時に番号の前にＳＫ、ＳＤなど遺構の種類ごとの略称を付した。ピットは、小地区ごとに地区名を冠した通し番号を付した。

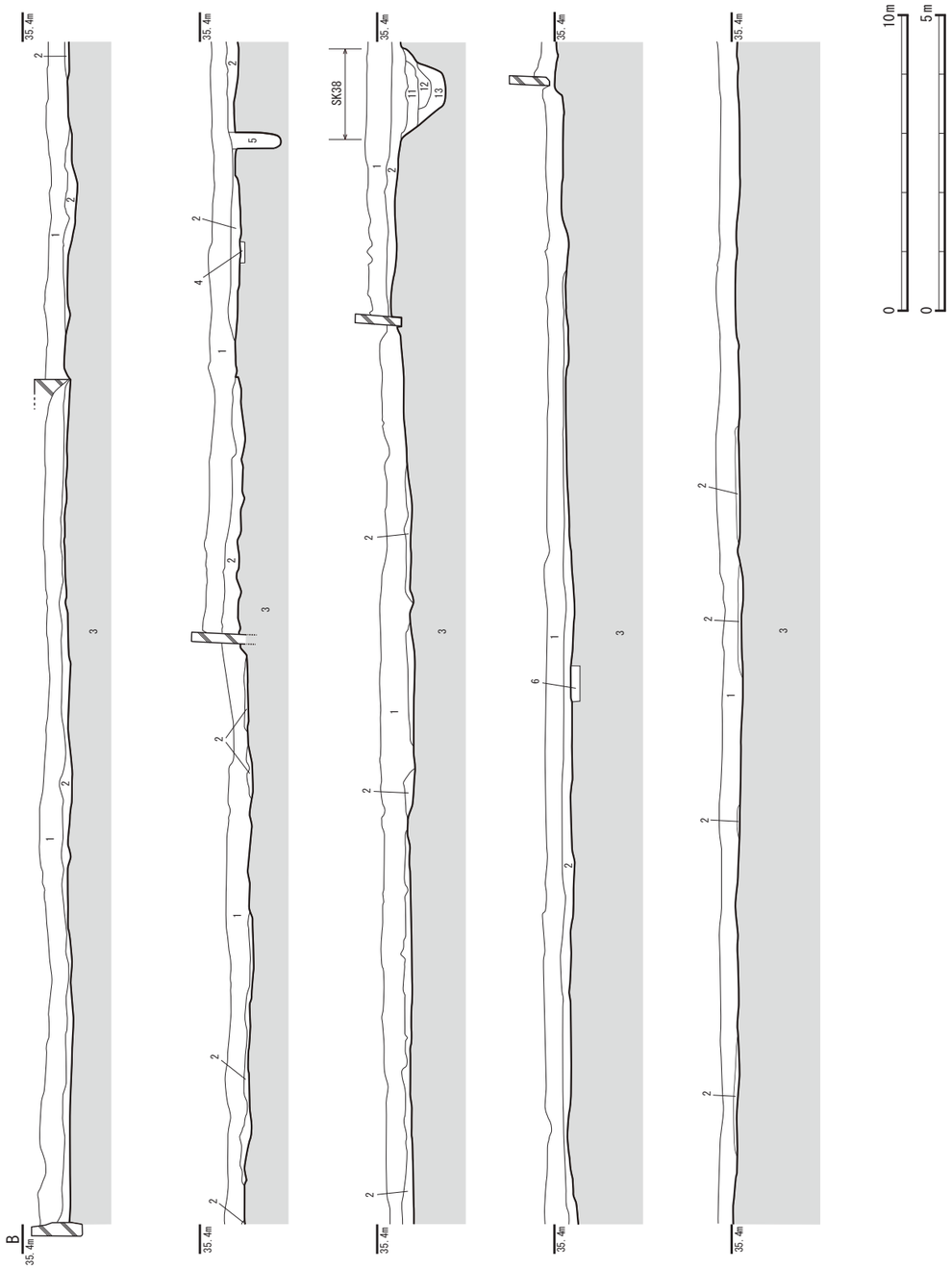


第４図　横谷遺跡一次調査区配置図（1:2,500）

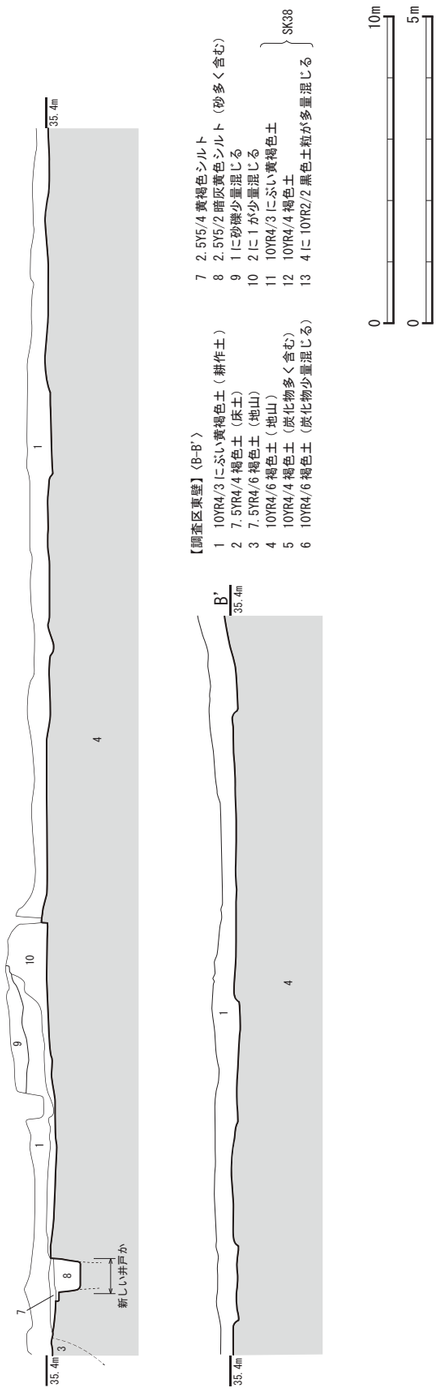
第５図　横谷遺跡二次調査区配置図（1：1,000）



第６図　横谷遺跡遺構配置図（1：500）



第７図　調査区東壁断面図①（水平 1:200 鉛直 1:100）断面位置は第６図参照



第８図　調査区東壁断面図②
（水平 1:200 鉛直 1:100）

２．基本層位

調査の結果確認された基本層位は、上から①にぶい黄褐色土（表土・耕作土）、②褐色土（水田床土）、③褐色土（地山）となっており、③層の上面を検出面とした（第７・８図）。さらに③層の下は、褐色砂礫層およびにぶい黄褐色砂礫層となっており、検出面上では部分的にこうした層が露出する箇所も見られた。このほか、調査区南部や北部では②層と③層の間に過去の区画整理時の盛り土が厚く入れられている箇所があった（第９図）。調査中に近隣の方から聞き取った話では、戦前に耕地整理を行った際に地盤を削って谷側にトロッコで土を移動したとのことである。そのため、遺構も著しい削平を受けている部分があった。

３．遺構

調査の結果検出された遺構は主に竪穴式住居、掘立柱建物、土坑、溝である。所属時期が明らかなものはいずれも古墳時代前期であるが、古墳時代後期の遺物も若干出土しているため、調査区外にこの時期の遺構が存在する可能性がある。

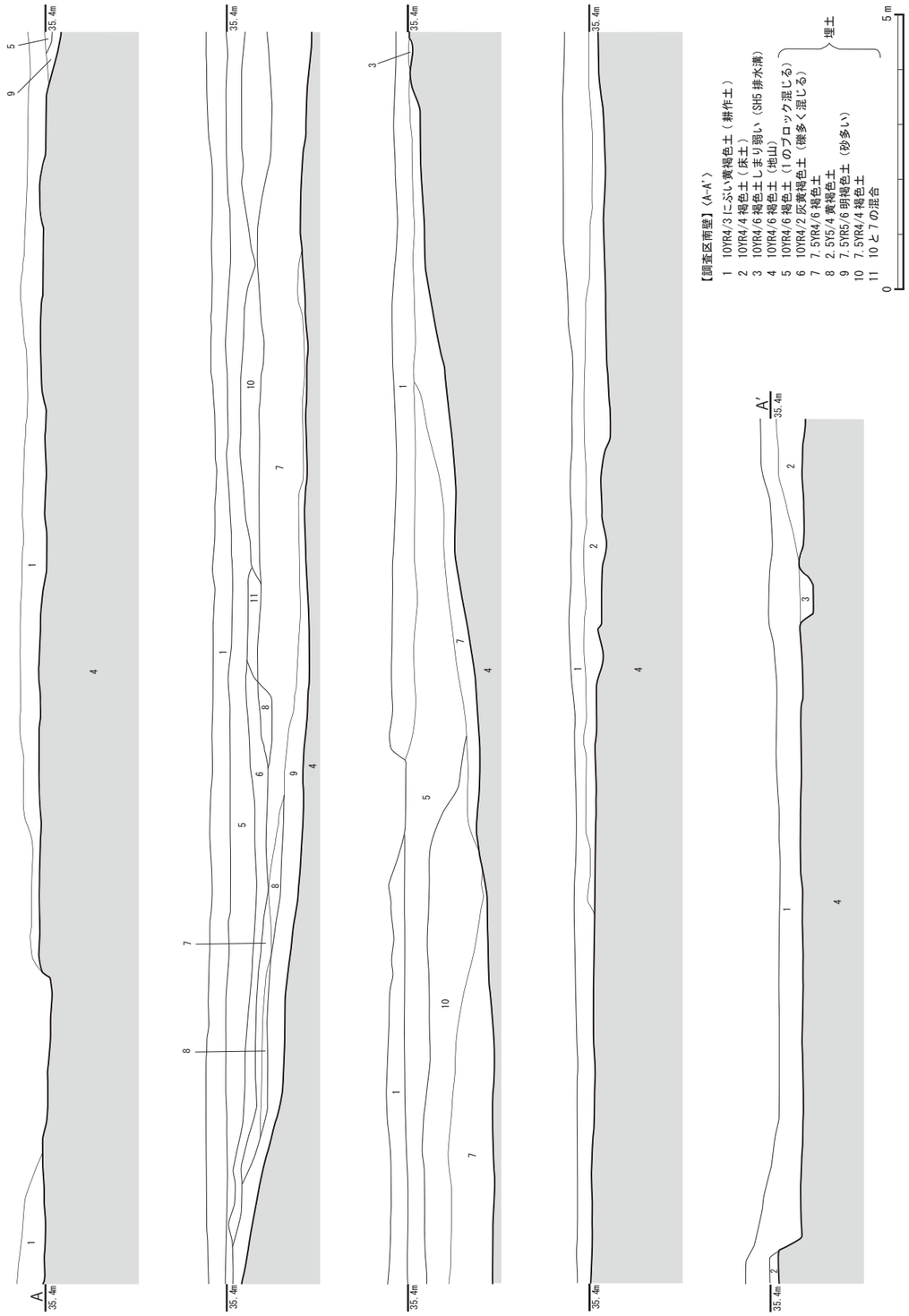
（１）竪穴住居

ＳＨ１（第 10 図）　調査区南部の丘陵端付近に位置する。東西 7.8m、南北 8.1mの方形で、東側は一次調査時のトレンチで大きく削平されている。東辺には排水溝ＳＤ12 がつく。この溝は、ＳＨ1 から南方へ 9.5m続いて終わっているが、本来は南側の谷に排水できるようになっていたと考えられる。主柱穴は直径 0.5 ～ 0.4mのものを４箇所確認した。壁周溝は削平されている東側を除き全周で確認した。

壁際の床面には木炭が散在し、西側の壁面が一部赤変していたので、焼失住居と考えられる。

住居に伴うと考えられる出土遺物は古墳時代前期の土師器壺・甕・台付甕・高杯があり、埋土上層中から７世紀代の須恵器杯身が出土した。

ＳＨ２（第 11 図）　調査区南部西側で検出した古墳時代前期の竪穴住居である。重複して建てられている掘立柱建物ＳＢ８より古い。耕地整理に伴う削平で残存状況は非常に悪く、平面プランもはっきりしないが、東西 4.5m、南北 5.0m の方形と考えられる。直径 0.4 ～ 0.3m の主柱穴４か所を確認した。



第９図　調査区南壁断面図（1:100）断面位置は第６図参照

床面には被熱痕が少なくとも７か所確認できる。壁周溝は確認できない。出土遺物は土師器高杯・台付甕などがある。

ＳＨ３（第 12 図）　調査区中央部で検出した古墳時代前期の竪穴住居である。中央部分が一次調査に伴うトレンチで削平されているが、東西 7.0m、南北 7.6m の方形である。検出面から床面までの深さは 0.25ｍで、全周する壁周溝を有する。床面の中央やや西よりに炉跡が１か所あるほか、南西隅には貯蔵穴と考えられる土坑がある。南西隅から排水溝であるＳＤ24 が伸びている。柱穴は直径 0.3 ～ 0.4ｍ、深さ 0.4 ～ 0.6ｍのものを４か所確認した。出土遺物は、土師器台付甕・器台・高杯、鉄製品の錐、石製の砥石、焼土塊がある。

ＳＨ４（第 12 図）　ＳＨ３の北側で検出した古墳時代前期の竪穴住居である。南東隅部分が一次調査に伴うトレンチで削平されているが、東西 4.5m、南北 4.7m の方形である。検出面から床面までの深さは 0.1ｍで、壁周溝・主柱穴ともに有しない。出土遺物は少量の土師器台付甕・高杯のほか焼土塊がある。

ＳＨ５（第 13 図）　調査区南辺で検出した竪穴住居である。耕地整理に伴う削平で主柱穴と炉跡及び排水溝が残存する状態である。柱穴は直径 0.2 ～ 0.3m、検出面からの深さ 0.4ｍのものを４か所確認した。柱間は東西南北共に 3.1m である。出土遺物はなく時期は不明であるが、検出状況から古墳時代前期と考えられる。

ＳＨ６（第 13 図）　ＳＨ５と同様、調査区南辺で検出した竪穴住居である。耕地整理に伴う削平で主柱穴と排水溝が残存する状態である。柱穴は直径 0.4ｍ、検出面からの深さ 0.4ｍのものを４か所確認した。柱間は東西 2.3 ～ 2.6m 南北 2.3m である。出土遺物はなく時期は不明であるが、検出状況から古墳時代前期と考えられる。

ＳＨ２８（第 13 図）　調査区中央部で検出した古墳時代前期の竪穴住居である。西側部分が一次調査に伴うトレンチで削平されているが、東西 4.3m、南北 4.9m の方形と考えられる。検出面から床面までの深さは 0.25ｍで、全周する壁周溝を有する。南西隅に貯蔵穴と考えられる土坑がある。主柱穴はない。出土遺物は、土師器壺・台付甕、焼土塊がある。

ＳＨ２９（第 14 図）　調査区中央部で検出した古墳時代前期の竪穴住居である。西側部分が耕地整理により削平されているが、東西 3.4m、南北 3.9m の方形と考えられる。検出面から床面までの深さは 0.1ｍで、主柱穴はない。南西隅に貯蔵穴と考えられる SK34 がある。出土遺物は、土師器壺・台付甕がある。

ＳＨ３０（第 14 図）　調査区北部で検出した古墳時代前期の竪穴住居である。東西 4.9m、南北 5.5m の方形とである。検出面から床面までの深さは 0.35ｍで、南西隅に貯蔵穴と考えられる SK36 がある。柱穴は直径 0.3 ～ 0.4m、深さ 0.3 ～ 0.4mのものを４か所確認した。出土遺物は、土師器台付甕・鉢がある。

（２）掘立柱建物

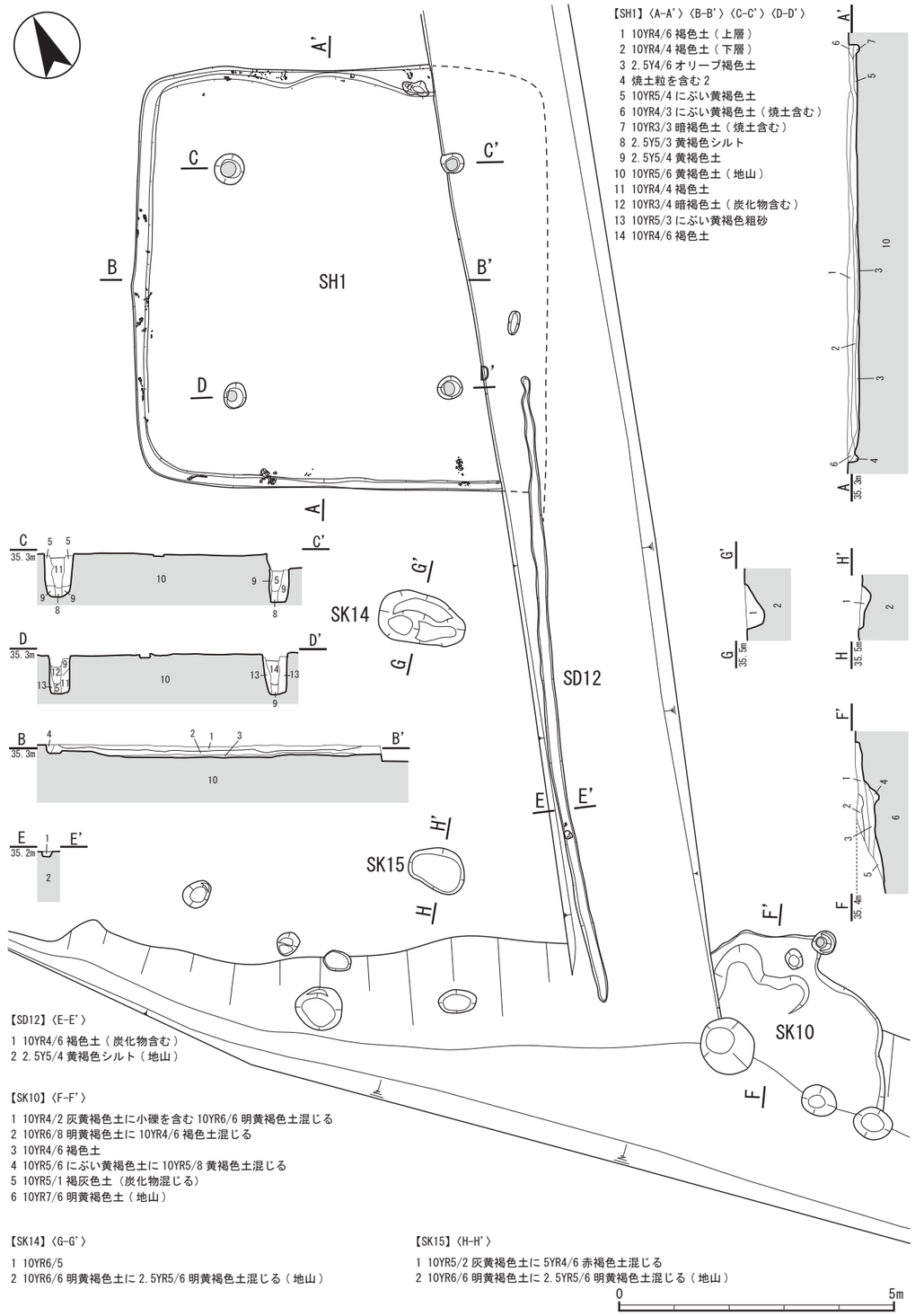
ＳＢ７（第 11 図）　調査区南部西側に位置する南北棟側柱建物である。桁行２間、梁行２間で、棟方向はＮ37°Ｅ、平面規模は桁行 4.4m、梁行 4.0m で、柱穴は 0.3 ～ 0.5m の直径がある。出土遺物はなく時期不明であるが、重複関係から古墳時代前期の SH2 よりは新しいものである。

ＳＢ８（第 11 図）　調査区南部西側に位置する東西棟側柱建物である。桁行３間、梁行２間で、棟方向はＮ38°Ｗ、平面規模は桁行 2.9m、梁行 2.8m で、柱穴は 0.2 ～ 0.3m の直径がある。出土遺物はなく時期不明である。

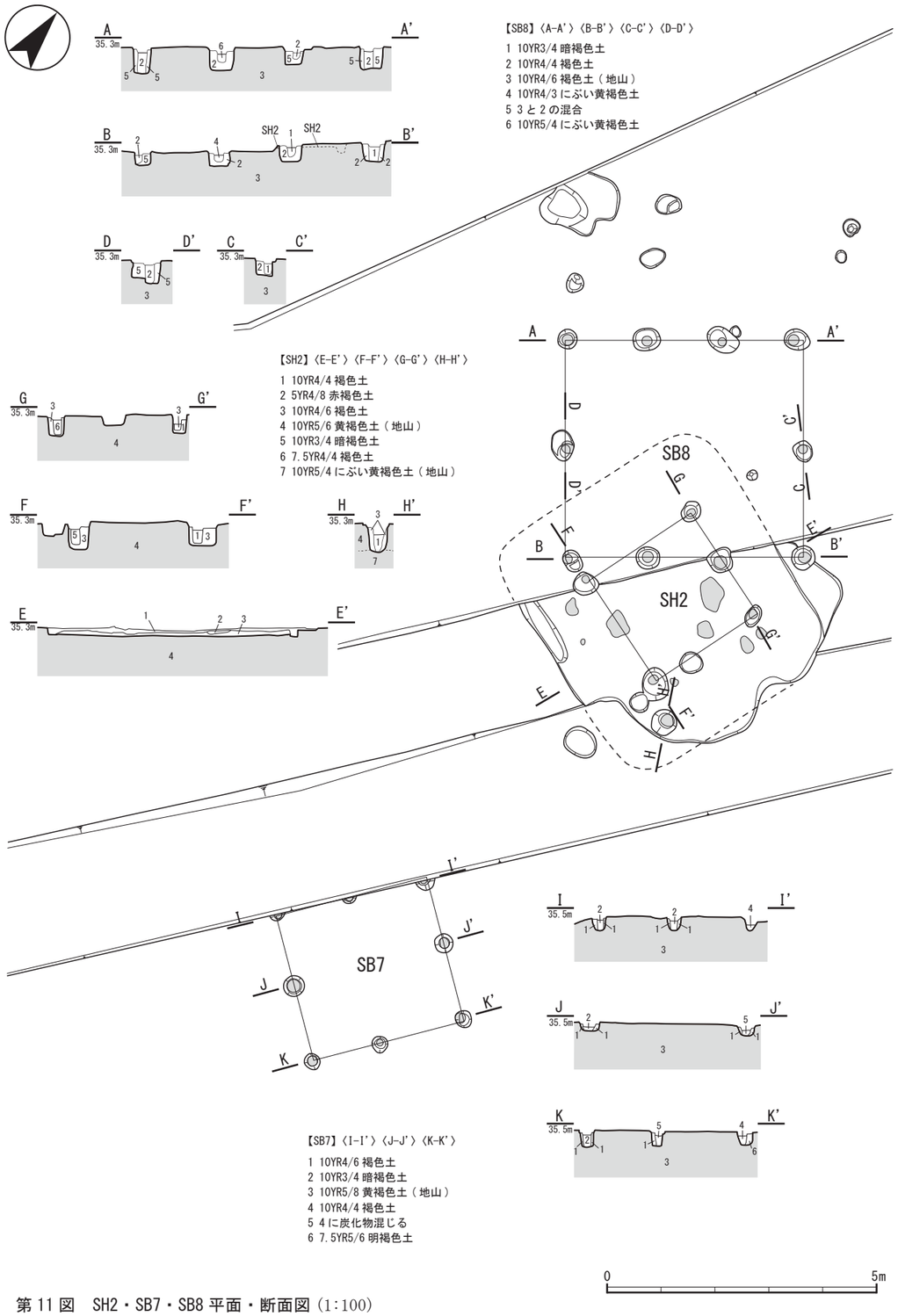
ＳＢ25（第 12 図）　調査区中央部西寄りに位置する東西棟側柱建物である。桁行３間、梁行２間で、棟方向はＮ25°Ｗ、平面規模は桁行 5.2m、梁行 3.2m で、柱穴は 0.2 ～ 0.3m の直径がある。出土遺物はなく時期不明である。北辺の柱列は第１次調査時には調査区外のため確認できていなかったが、平成 31 年度に隣接地で実施した第 2 次調査においてピット２基を検出した。

（３）土坑

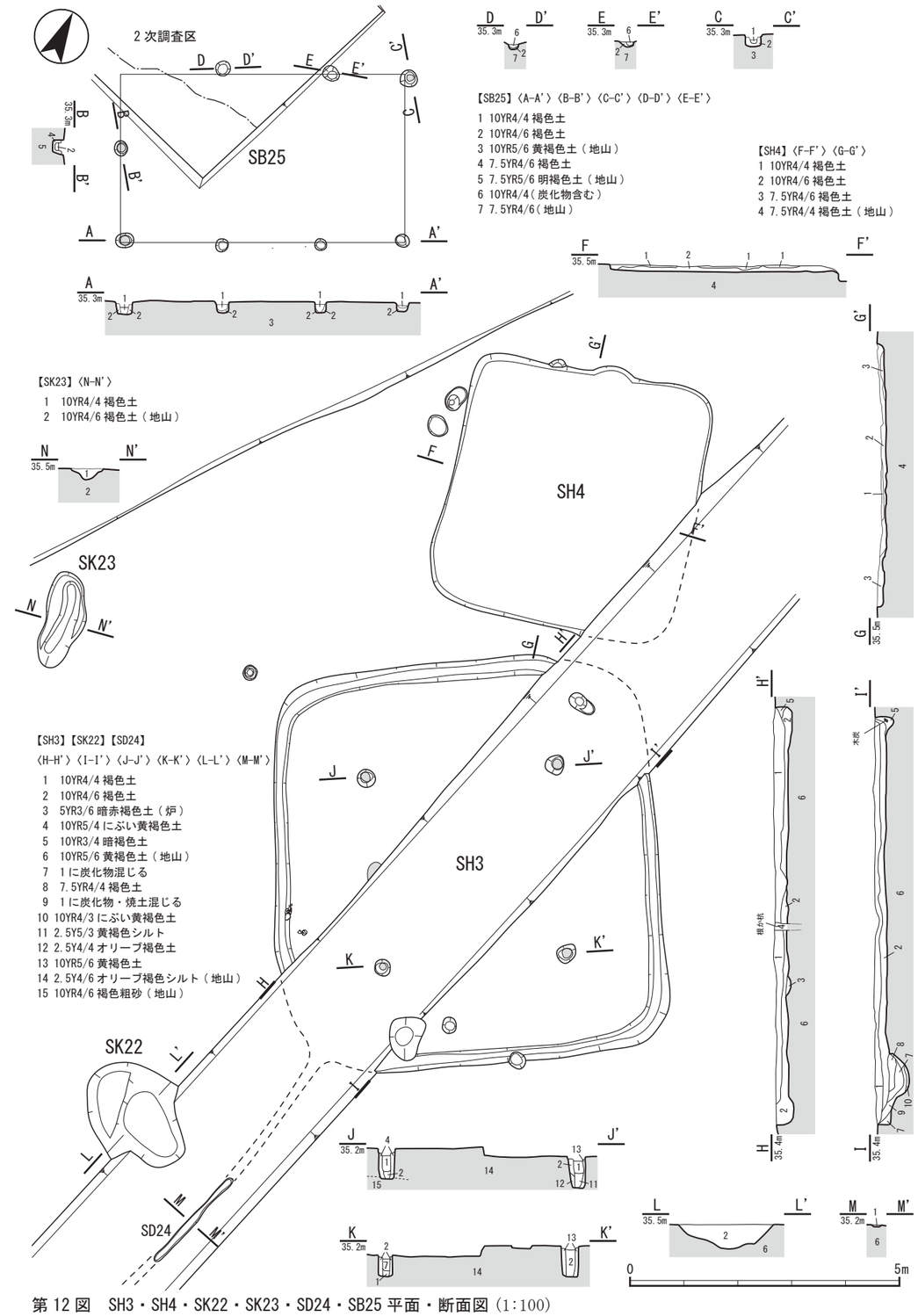
ＳＫ10（第 10 図）　調査区の南端部で検出した不



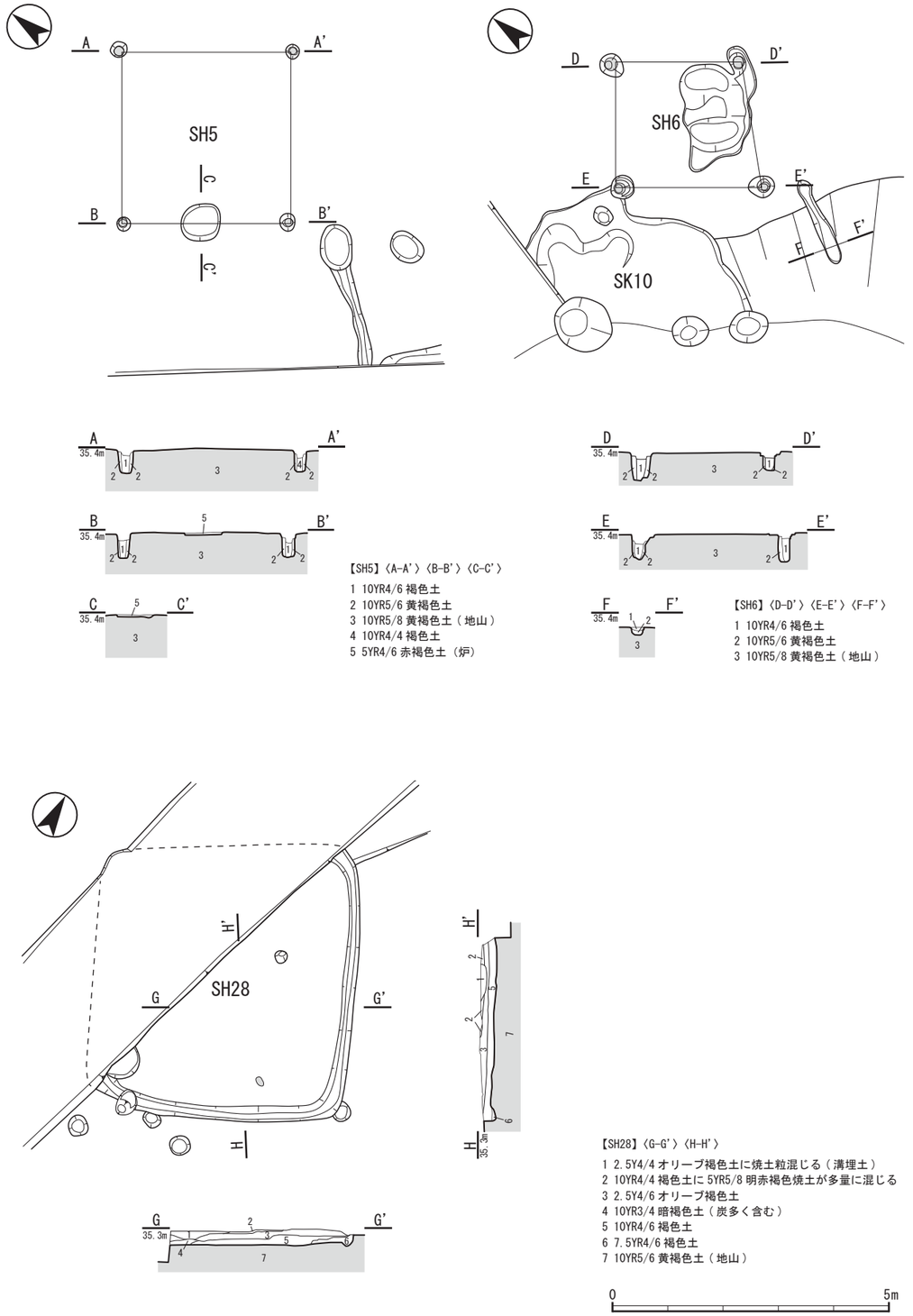
第 10 図　SH1・SD12・SK10・SK14・SK15 平面・断面図（1:100）



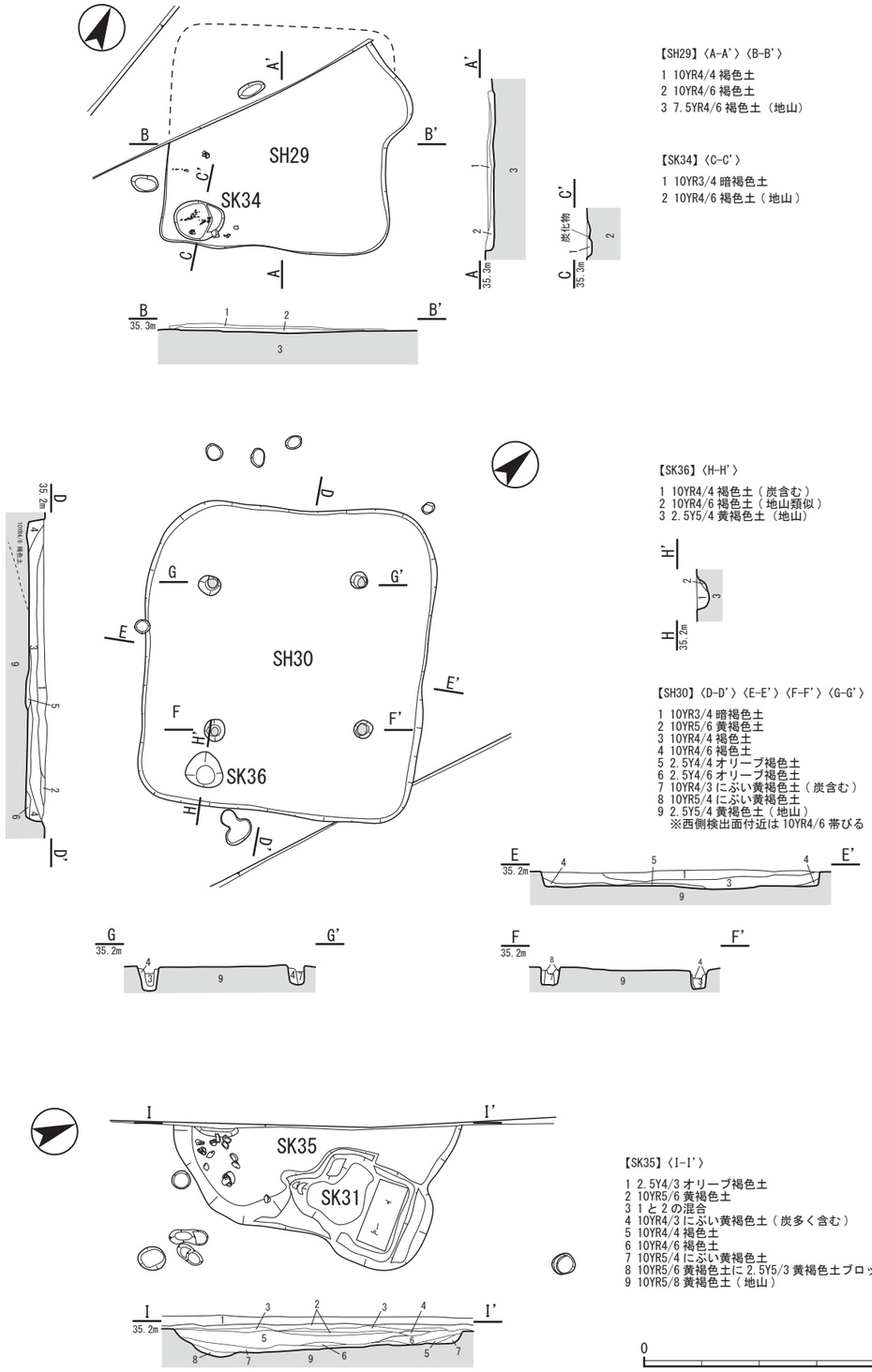
第 11 図　SH2・SB7・SB8 平面・断面図（1:100）



第 12 図　SH3・SH4・SK22・SK23・SD24・SB25 平面・断面図（1:100）



第 13 図　SH5・SH6・SK10・SH28 平面・断面図 (1:100)



第 14 図 SH29・SK34・SH30・SK36・SK31・SK35 平面・断面図 (1:100)

整形土坑である。東西 2.5m、南北 4.0m で、検出面からの深さは 0.5m である。出土遺物は土師器、須恵器があるが、埋土の状況から比較的新しい時期の落ち込みと考えられる。

ＳＫ11（第 11 図）　調査区中央部西寄りで検出した不整形土坑である。東西 1.1m、南北 1.0m で、検出面からの深さは 0.2m である。出土遺物は土師器台付甕、焼土塊がある。

ＳＫ13　SH1 の南壁際において確認した土坑で、ＳＨ１より新しい。出土遺物は土師器台付甕・壺がある。

ＳＫ14（第 10 図）　ＳＨ１の南側で検出した楕円形土坑である。東西 1.5m、南北 0.9m で、検出面からの深さは 0.3m である。

ＳＫ15（第 10 図）　ＳＨ１の南側で検出した楕円形土坑である。東西 1.0m、南北 0.8m で、検出面からの深さは 0.2m である。

ＳＫ17（第 15 図）　調査区中央部で検出した不整形土坑である。東西 1.6m、南北 0.8m で、検出面からの深さは 0.2m である。出土遺物は、土師器台付甕・高杯がある。

ＳＫ18（第 15 図）　調査区南部で検出した楕円形土坑である。東西 1.0m、南北 1.6m で、検出面からの深さは 0.2m である。

ＳＫ19（第 15 図）　調査区南部で検出した不整形土坑である。東西 1.0m、南北 1.7m で、検出面からの深さは 0.3m である。

ＳＫ21（第 15 図）　調査区中央部東寄りで検出した不整形土坑である。東西 1.0m、南北 2.2m で、検出面からの深さは 0.4m である。

ＳＫ22（第 12 図）　ＳＨ３の南側で検出した土坑である。東西 2.2m、南北 1.8m で、検出面からの深さは 0.4m である。東側を一次調査のトレンチで大きく削られている。

ＳＫ23（第 12 図）　ＳＨ３の西側で検出した土坑である。東西 0.8m、南北 1.8m で、検出面からの深さは 0.1m である。

ＳＫ26（第 15 図）　調査区中央部で検出した方形土坑である。東西 1.0m、南北 1.3m で、検出面からの深さは 0.2m である。

ＳＫ27（第 15 図）　調査区中央部西壁際で検出した楕円形土坑である。東西 0.9m、南北 1.５ m で、検出面からの深さは 0.2m である。中層の暗褐色土から土師器台付甕などの遺物が集中して出土した。

ＳＫ31（第 14 図）　調査区中央部西壁際で検出した土坑である。近代の鉄塔基礎坑で、古墳時代前期の大型土坑 SK35 の一部を破壊している。

ＳＫ33　調査区中央部西寄りで検出した土坑である。近代の鉄塔支線（ハンド）の埋設坑で、SK31 に対応するものである。出土遺物は土師器がある。

ＳＫ35（第 14 図）　調査区中央部西壁際で検出した大型土坑である。南北 5.0m、東西 1.8m 以上で、地表面からの深さは 0.6m である。戦前の送電鉄塔の基礎であるＳＫ31 により東側の一部が破壊されている。床面南端には拳大の円礫が集中する部分がある。出土遺物は土師器がある。

ＳＫ37（第 15 図）　調査区中央部で検出した不整形土坑である。東西 1.2m、南北 1.4m で、検出面からの深さは 0.2m である。

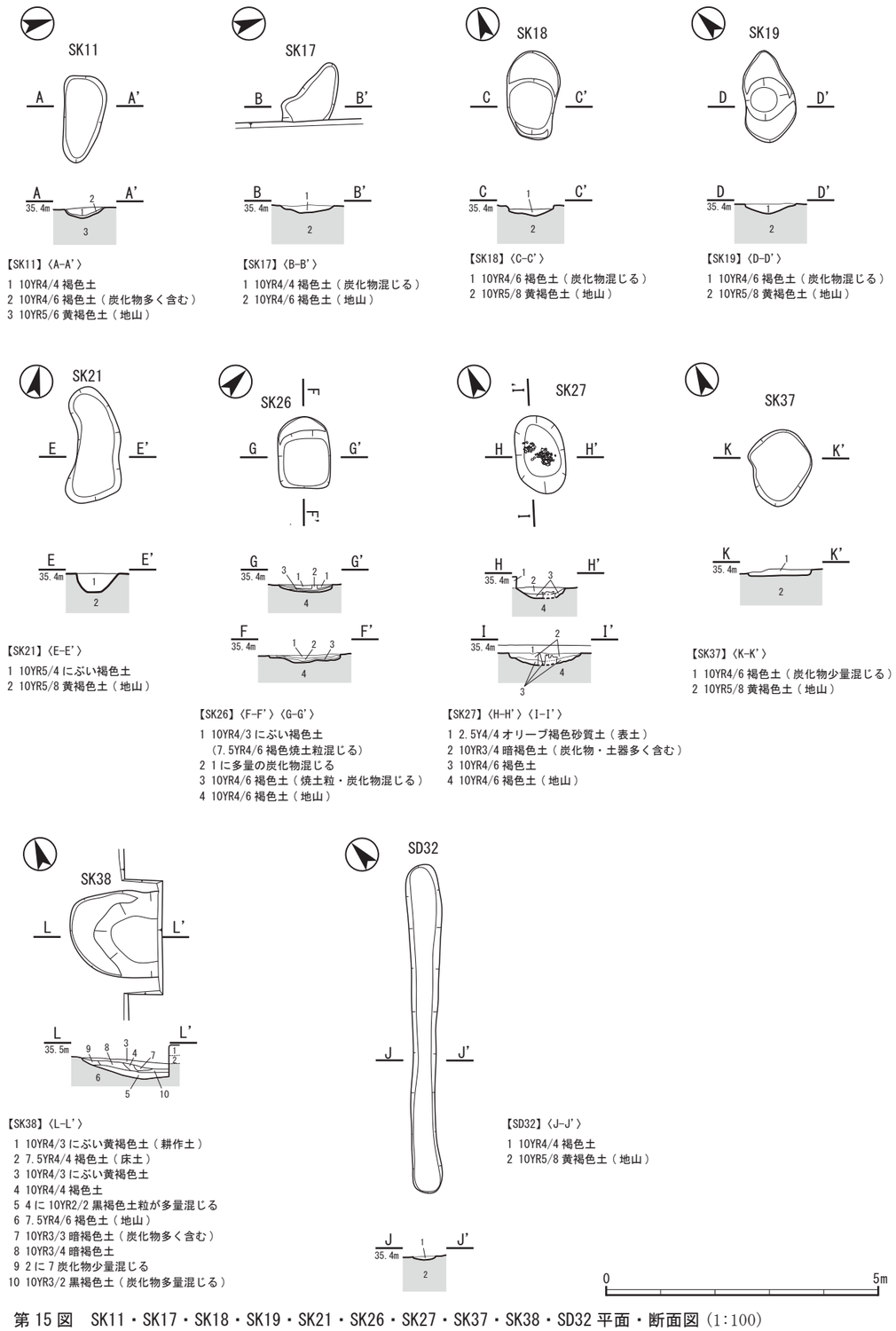
ＳＫ38（第 15 図）　調査区中央部西壁際で検出した楕円形土坑である。東西 1.7m 以上、南北 1.６ m で、検出面からの深さは 0.3m である。中層の暗褐色土から土師器壺・台付甕などの遺物が集中して出土した。

ＳＫ39 SK38 の西側で検出した不整形土坑である。東西 1.2m、南北 1.4m で、検出面からの深さは 0.2m である。

ＳＫ40　調査区北部で検出した方形土坑である。近代の鉄塔基礎坑で、SK31 と一連のものである。

（４）溝

ＳＤ32（第 15 図）　調査区中央部で検出した南北溝である。全長 6.2m、幅 0.4 ～ 0.6m で、検出面からの深さは 0.1m である。



第 15 図　SK11・SK17・SK18・SK19・SK21・SK26・SK27・SK37・SK38・SD32 平面・断面図（1:100）

４．遺物

今回の調査で出土した遺物量は、土器・石製品など、コンテナで26箱分である。本遺跡では従来、弥生土器と石鏃の出土が報告されており、弥生時代の遺跡として認識されていた。しかし、調査では主として古墳時代前期の土師器のほか須恵器も出土したことに加え、出土した石鏃は全て縄文時代のものであった。この成果により、縄文時代・古墳時代前・後期の複合遺跡であることが明らかになった。しかし、縄文時代と古墳時代後期の遺構は今回の調査では確認していない。

（１）竪穴住居出土遺物（第 16 図）

ＳＨ１（１～ 10）　古墳時代前期前半。１は土師器小型無頸鉢である。２は土師器広口壺で、口縁部内面に刺突により羽状文を施す。外面にも羽状文のあった形跡がある。３・４は高杯の脚部である。５・６・７は壺の底部である。８は７世紀前半の須恵器杯身である。埋土上層からの出土で、混入品である。９は砥石で、比較的緻密な軽石である。１０は鉄製品の小片で、器種は不明である。このほか、図示していないがＳ字状口縁台付甕の小片、赤彩された壺胴部片も出土している。

ＳＨ２（12）　古墳時代前期前半。９は土師器台付甕の台部である。このほかに図示していないが、土師器く字状口縁甕、Ｓ字状口縁台付甕の小片も出土している。

ＳＨ３（13 ～ 17）　古墳時代前期前半。13 は土師器Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類。14 は土師器器台。15 は土師器椀型高杯。16 は土師器高杯脚部。17 は鉄製品の錐と考えられる。

ＳＨ28（18）　古墳時代前期前半。18 は土師器広口壺である。口縁部外面に羽状文を施す。このほかに図示していないが、土師器Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類の小片も出土している。

ＳＨ29（19 ～ 21）　古墳時代前期前半。19 ～ 21 は土師器台付甕の台部である。胎土からみて 19 はく字状口縁甕、20・21 は恐らく同一個体のＳ字状口縁台付甕と考えられる。

ＳＨ30（22 ～ 24）　古墳時代前期前半。22 は土師器丸底甕、23 はく字形口縁鉢でＳ字状口縁台付甕と共通する胎土・焼成のものである。24 は土師器台付甕の台部である。

（２）土坑出土遺物（第 16・17 図）

ＳＫ11（25）　古墳時代前期前半。25 は土師器台付甕の台部である。

ＳＫ13（26）　古墳時代前期前半。26 は土師器Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類の新段階のものである。

ＳＫ17（27・28）　古墳時代前期前半。27 は土師器壺底部、28 は土師器高杯又は器台の脚部である。

ＳＫ27（29 ～ 42）　古墳時代前期前半。29 ～ 33 は土師器Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類の古段階のものである。34 ～ 38 は土師器台付甕の台部である。39 ～ 42 は土師器高杯脚部である。

ＳＫ38（43 ～ 47）　古墳時代前期前半。43 は土師器丸底甕、44 は土師器広口壺、45 は土師器台付甕の台部。46・47 は土師器壺の底部である。

（３）溝出土遺物（第 16 図）

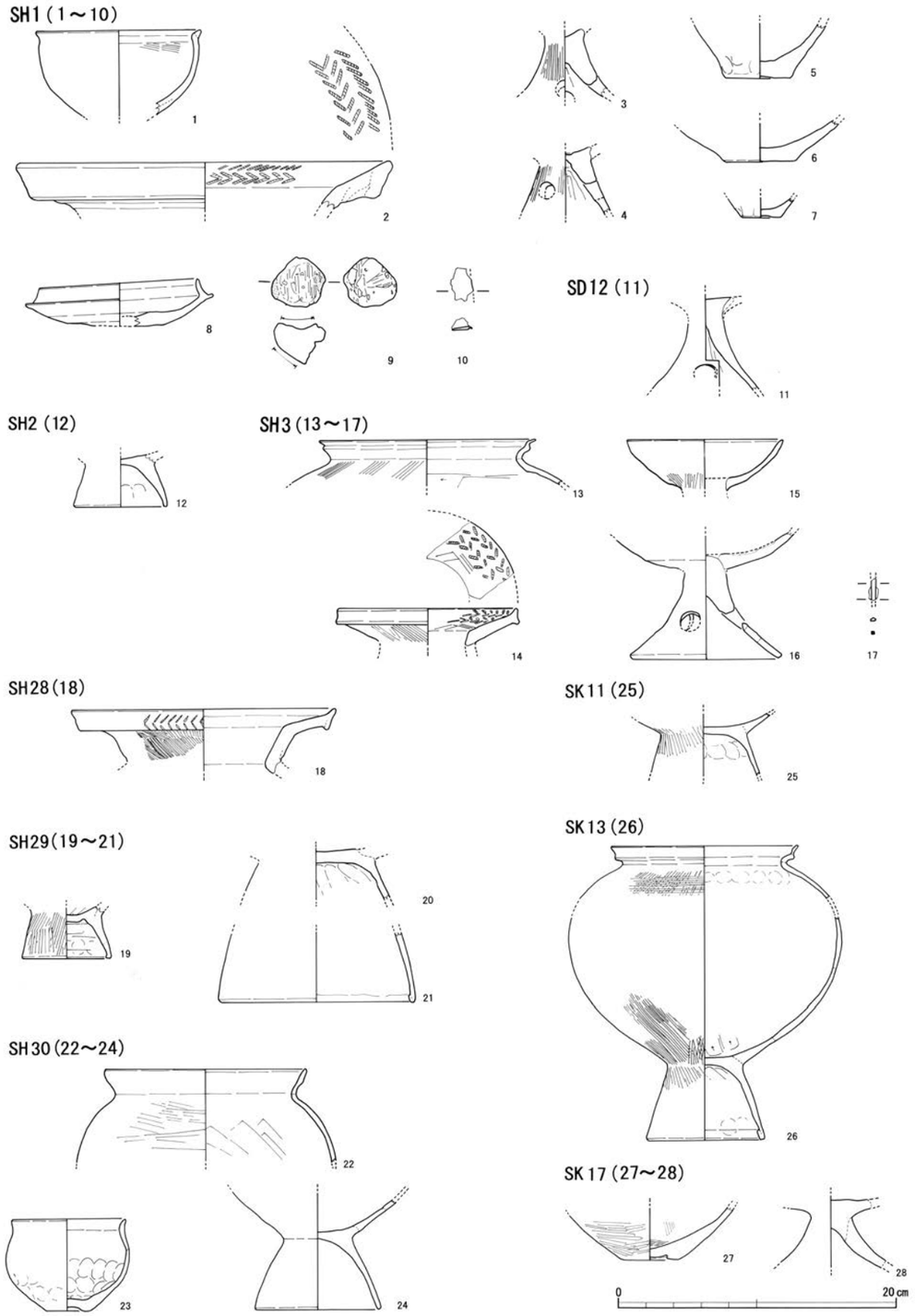
ＳＤ12（11）　ＳＤ12 はＳＨ１の排水溝で、出土した 11 は土師器高杯脚部である。このほか、溝内からは壺胴部片も出土している。

（４）包含層出土遺物及び石製品（48 ～ 57）（第 17 図）

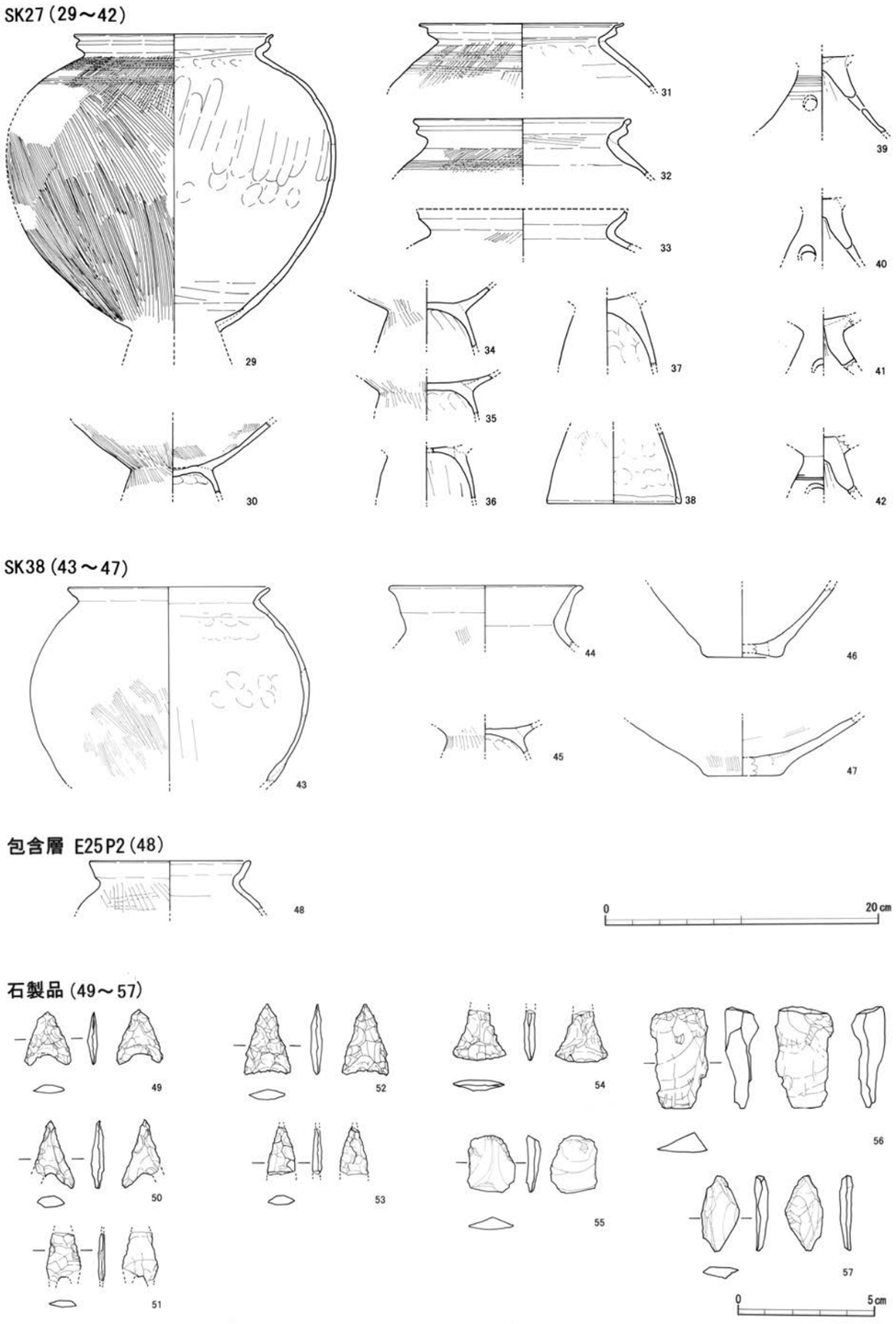
48 は土師器受口甕である。49 ～ 57 は縄文時代の石器である。石器は全て竪穴住居内の埋土を篩がけして取り上げたものであるが、いずれも縄文時代のもので住居に伴う遺物ではないことからここにまとめた。49 は下呂石製、50 はチャート製、51 ～ 53 はサヌカイト製の石鏃である。54 はサヌカイト製の石匙であるが、上端が欠けており、石鏃の可能性もある。55 と 56 はサヌカイト、57 はチャートの使用痕を有する剥片である。このほか、多数の下呂石・サヌカイト・チャートの剥片が出土しており、縄文時代に属すると考えられる石製品は調査区全体で製品も含めて約 60 点ある。これの分布状況については、結語で述べる。

【参考文献】

土器類の分類及び編年は、以下の文献に拠った。
穂積裕昌「第３節　弥生後期～古墳時代土師器の型式分類」『六大Ａ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002
四日市市教育委員会『久留倍遺跡５　－遺物編－』2013
四日市市教育委員会『久留倍遺跡 6』2013



第 16 図　遺物実測図①（1:4）



第 17 図　遺物実測図②（1:4）

R 番号	報告書番号	出土位置 出土遺構	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度（%）	備考
R1-7	1	F28 SH1 北西上層	土師器 鉢	11.6	－	－	外ー磨滅 内ーヨコナデ、ハケ、磨滅	やや密（1～2㎜の砂粒含む）	良	灰白（10YR8/2）	口 10	
R1-1	2	表土 SH1 付近	土師器 壺	26.4	－	－	外ーヨコナデ、磨滅 内ー羽状文、磨滅	やや密（0.5～4㎜の砂粒含む）	良	橙（5YR7/6）	口 10	
R1-4	3	E29,F29 SH1 南西	土師器 高杯か台付壺	－	－	－	外ータテミガキ、透孔４方向 内ーシボリ痕	やや密（2～3㎜の砂粒含む）	良	橙（7.5YR7/6）	脚 50	
R1-5	4	F28,F29 SH1 北西上層	土師器 台付壺	－	－	－	外ータテミガキ、透孔３方向、磨滅 内ーナデ、ヘラ・ハケ状板によるタテ方向ナデ	密（1～2㎜の砂粒含む）	良	にぶい黄橙（10YR7/4）	台 40	
R1-2	5	No.11 SH1	土師器 壺	－	4.5	－	外ーユビオサエ、ナデ、磨滅 内ー磨滅	やや密（0.5～2㎜の砂粒含む）	良	灰黄（2.5Y7/2） 黄灰（2.5Y5/1）	底 100	
R1-6	6	F28,F29 SH1 北西上層	土師器 壺	－	4.8	－	外ー磨滅 内ー磨滅	やや密	良	にぶい橙（7.5YR6/4） にぶい黄橙（10YR7/3） 黄灰（2.5Y4/1）	底 40	
R1-8	7	G28,G29 SH1 北東上層	土師器 小形壷か甕	－	2.7	－	外ー板ナデ、ナデ 内ーナデ	密	良	浅黄橙（10YR8/3） 褐灰（10YR5/1）	底 100	
R1-3	8	E29,F29 SH1 南西上層	須恵器 杯身	11.3	受部径 13.4	3.1	外ーロクロナデ、磨滅 内ーロクロナデ	密	不良	にぶい褐（7.5YR5/4） にぶい黄橙（10YR7/4）	40 （口 5）	
R12-1	9	G28,G29 SH1 北東上層	石製品 砥石	最大長 3.5	最大幅 3.7	最大厚 2.5		－	－	－	－	石質：軽石 重量：4.40g
R12-3	10	SH1 南西	鉄製品 不明	最大長 2.3	最大幅 1.5	最大厚 0.9		－	－	－	－	重量：2.76g
R3-2	11	トレンチ２ SD12	土師器 高杯	－	－	－	外ー透孔１方向、磨滅 内ーナデ、シボリ痕	密（0.5～2㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙（7.5YR8/6） 橙（7.5YR7/6）	脚 50	
R2-1	12	SH2 西半	土師器 台付甕	－	6.5	－	外ー磨滅 内ー指オサエ、ナデ、磨滅	やや粗	良	橙（5YR7/6）	台 100	胎土表面に汚れ付着
R2-3	13	SH3 東部上層	土師器 S 字甕	15.4	－	－	外ーヨコナデ、タテハケ、磨滅 内ーヨコナデ、板ナデ、磨滅	やや粗（0.5～7㎜の砂粒・小石含む）	良	灰白（10YR8/2）	口 35	
R2-2	14	SH3 東	土師器 器台	12.7	－	－	外ーヨコナデ、ハケ 内ー羽状文２段、ハケ、ナデ	密	良	にぶい黄橙（10YR6/3）	口 10	胎土表面に汚れ付着
R2-4	15	SH3 西周溝	土師器 高杯	11.2	－	－	外ータテミガキ、磨滅 内ー磨滅	密	良	橙（2.5Y6/8） 暗灰（N3/0）	杯 40	
R2-5	16	I23 SH3②	土師器 高杯	－	脚 10.4	－	内外－透孔３方向、剥離、磨滅	やや密	やや良	にぶい黄橙（10YR7/4） 橙（7.5YR7/6）	脚 70	
R12-2	17	SH3 東半周溝	鉄製品 錐	最大長 1.6	最大幅 0.35	最大厚 0.25		－	－	－	－	重量：0.53g
R8-1	18	SH28 南西	土師器 壺	18.9	－	－	外ー羽状文、ヨコナデ、ナナメハケ 内ー磨滅	やや密〈1～2㎜の砂粒含む〉	良	浅黄橙（10YR8/4）	口 10	胎土表面に汚れ付着
R8-2	19	M16 SH29 南西アゼ	土師器 台付甕	－	6.3	－	外ーナナメハケ、ナデ 内ー板ナデ、ナデ、指オサエ後板ナデ・ナデ	やや粗（0.5～3㎜の砂粒含む）	良	赤橙（10R6/6） にぶい黄橙（10YR7/3）	台 90	
R8-3	20	SH29①	土師器 台付甕	－	－	－	外ー磨滅　粘土接合面に指オサエ痕 内ーナデ、指オサエ、指ナデ	やや粗（0.5～5㎜の砂粒・小石含む）	良	淡赤橙（2.5YR7/3）	台 30	21 と同一個体か
R8-4	21	SH29①	土師器 台付甕	－	13.6	－	内外ー磨滅	やや粗（0.5～6㎜の砂粒・小石含む）	良	淡赤橙（2.5YR7/3） 橙（2.5YR7/6）	底 25	20 と同一個体か
R9-2	22	SH30 南上層	土師器 甕	14.4	－	－	外ーヨコハケ、磨滅 内ー工具痕、磨滅	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙（7.5YR8/3）（7.5YR8/4）	口 30	
R9-1	23	SH30 南	土師器 鉢	8.2	3.0	6.6	外ー指オサエ、磨滅 内ー指オサエ	やや粗（0.5～3㎜の砂粒含む）	やや良	灰白（2.5Y8/2） 灰（5Y5/1）	40	
R9-3	24	SH30 南上層	土師器 台付甕	－	8.8	－	内外ー磨滅	やや密（0.5～4㎜の砂粒含む）	やや良	浅黄橙（10YR8/4）	台 25	
R3-1	25	SK11 アゼ	土師器 S 字甕	－	台接部 6.2	－	外ーナナメハケ 内ー指オサエ、磨滅	やや粗	良	淡赤橙（2.5YR7/4） にぶい黄橙（10YR7/3）	台 30	
R4-1	26	F30 SK13	土師器 S 字甕	13.4	8.0	21.3	外ーヨコナデ、ナナメハケ後ヨコハケ、ナナメハケ、磨滅 内ーヨコナデ、指オサエ、ケズリ、磨滅	やや粗（1～3㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙（10YR8/3） にぶい橙（5YR7/3）	口 20	外面にスス付着 台部内面に砂貼付
R5-2	27	M24 SK17	土師器 壺か杯	－	4.0	－	外ーミガキ、ヘラ成形か 内ーハケ	やや密（1～5㎜の砂粒含む）	良	灰（N4/0）	底 95	内面胎土表面に汚れ付着
R5-1	28	SK17 アゼ	土師器 高杯	－	－	－	外ーナデ、磨滅 内ーナデ、磨滅	密	やや良	浅黄橙 （10YR8/3）	脚 30	胎土表面に汚れ付着 透孔アリか
R6-1	29	G19 SK27	土師器 S 字甕 B 類	13.8	－	－	外ーヨコナデ、ナナメハケ後ヨコハケ、ナナメハケ 内ーヨコナデ、ヨコハケ、指オサエ、指ナデ、磨滅	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 （10YR8/3）	口 75	外面にスス付着
R7-6	30	SK27 No.3	土師器 S 字甕	－	－	－	外ーナナメハケ 内ーナナメハケ、ナデ後砂貼付、指オサエ、ナデ	やや粗	良	にぶい黄橙（10YR7/3） にぶい橙（5YR7/4）	台 30	台部内面に砂貼付
R6-4	31	G19 SK27	土師器 S 字甕	14.3	－	－	外ーヨコナデ、ナナメハケ後ヨコハケ 内ーヨコナデ、ヨコハケ、指ナデ、指オサエ、横方向板ナデ？ケズリ？	やや粗（0.5～3㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙（10YR8/4） 褐灰（10YR5/1）	口 10	
R7-7	32	SK27 No.3	土師器 S 字甕	15.2	－	－	外ーヨコナデ、ナナメハケ後ヨコハケ 内ーヨコナデ、ヨコハケ、板ナデか	やや粗（0.5～2㎜の砂粒含む）	良	灰白（10YR8/2） 灰黄褐（10YR6/2）	口 20	
R6-5	33	G19 SK27	土師器 甕	頸 13.0	－	－	外ーヨコナデ、ナナメハケ 内ー磨滅	やや粗（0.5～3㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 （10YR8/4）	頸 15	
R7-1	34	SK27 No.2	土師器 S 字甕	－	－	－	外ーナナメハケ 内ー指ナデ、磨滅	やや粗（0.5～2㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 （10YR8/3）	台 40	台部内面に砂貼付
R7-5	35	SK27 No.3	土師器 S 字甕	－	－	－	外ーナナメハケ 内ー指オサエ、磨滅	やや粗（0.5～4㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 （10YR8/3）	台 20	
R6-6	36	G19 SK27	土師器 S 字甕	－	－	－	外ー磨滅 内ー指ナデ	やや粗（0.5～2㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 （7.5YR8/4）	台 20	
R7-4	37	SK27 No.3	土師器 台付甕	－	－	－	外ー磨滅 内ー指オサエ、磨滅	やや粗（0.5～3㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 （10YR8/4）	台 70	
R6-7	38	SK27 北	土師器 S 字甕	－	9.3	－	外ーナナメハケ、磨滅 内ーヨコナデ、指オサエ後調整（磨滅）	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 （10YR8/3）	台 45	
R6-3	39	G19 SK27	土師器 高杯	－	－	－	外ー直線文、磨滅、透孔３方向か 内ーシボリ痕、ナデ？、磨滅	やや密（0.5～2㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 （7.5YR8/6）	脚 20	
R7-3	40	SK27 No.3	土師器 高杯	－	－	－	外ー磨滅、透孔３方向 内ーシボリ痕、磨滅	やや密（0.5～3㎜の砂粒含む）	良	橙（2.5YR7/6）	脚 40	
R6-2	41	G19 SK27	土師器 高杯か台付壺	－	－	－	内外ー磨滅、透孔３方向？	やや粗（2㎜の白色砂粒含む）	良	橙（2.5YR6/8） 灰オリーブ（5Y6/2）	脚 25	
R7-2	42	SK27 No.3	土師器 高杯	－	－	－	外ーヨコナデ、直線文、透孔３方向 内ーシボリ痕、磨滅	やや密（0.5～3㎜の砂粒含む）	良	明黄褐 （10YR7/6）	脚 30	
R10-1	43	O19 SK38	土師器 甕	14.6	－	－	外ータテハケ、磨滅 内ー指オサエ後工具調整か、磨滅	やや密（0.5～3㎜の砂粒含む）	良	にぶい橙（7.5YR7/4） 橙（5YR7/6）	口 5	胎土表面に汚れ付着

第２表　遺物観察表①

R10-2	44	O19 SK38	土師器 壺	14.0	－	－	外―ヨコナデ、タテハケ、磨滅 内ー磨滅	やや密（0.5～5㎜の砂粒・小石含む）	良	浅黄橙 (10YR8/4)	口 15	胎土表面に汚れ付着
R10-3	45	O19 SK38	土師器 台付甕	－	－	－	外ーナナメハケ 内ー指オサエ、砂貼付	やや粗（0.5～3㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 (10YR8/3)	台 20	
R10-4	46	O19 SK38	土師器 壺	－	5.0	－	内外ー磨滅	やや粗（0.5～3㎜の砂粒含む）	良	浅黄橙 (10YR8/4)	底 30	
R10-5	47	SK38	土師器 壺	－	5.0	－	外―タテハケ、板ナデ。磨滅 内ーハケ、磨滅	やや密	良	浅黄橙（10YR8/4） 黄灰（2.5Y6/1）	底 45	胎土表面に汚れ付着
R11-1	48	E25P2 包含層	土師器 壺	11.6	－	－	外ーヨコナデ、ヨコハケ後タテハケ 内ーヨコナデ、磨滅	やや密	良	橙（5YR7/6）	口 20	胎土表面に汚れ付着
R11-3	49	E･F29 SH1 南西上層	石製品 石鏃	最大長 1.6	最大幅 1.6	最大厚 0.3		－	－	灰白（5Y7/1）	－	石質：下呂石 重量：0.74g
R11-2	50	SH1 南東下	石製品 石鏃	最大長 2.0	最大幅 1.2	最大厚 0.45		－	－	黄灰（2.5Y5/1）	－	石質：チャート 重量：1.03g
R11-5	51	SH28 南東	石製品 石鏃	最大長 1.75	最大幅 1.3	最大厚 0.25		－	－	灰（5Y5/1）	－	石質：サヌカイト 重量：0.56g
R11-6	52	SH28 北東周溝	石製品 石鏃	最大長 2.55	最大幅 1.65	最大厚 0.4		－	－	灰（N6/0）	－	石質：サヌカイト 重量：1.42g
R11-7	53	SH30 東	石製品 石鏃	最大長 1.7	最大幅 1.05	最大厚 0.35		－	－	灰（N6/0）	－	石質：サヌカイト 重量：0.66g
R11-4	54	J22 SH3 東	石製品 石匙	最大長 1.85	最大幅 1.95	最大厚 0.4		－	－	灰（N5/0）	－	石質：サヌカイト 重量：1.30g
R11-9	55	SH30 東	石製品 剥片	最大長 2.05	最大幅 1.7	最大厚 0.5	使用痕あり	－	－	灰（10Y5/1）	－	石質：チャート 重量：1.84g
R11-10	56	SH30 東	石製品 剥片	最大長 3.7	最大幅 2.1	最大厚 0.8	使用痕あり	－	－	灰（N5/0）	－	石質：チャート 重量：7.11g
R11-8	57	F29、F30 SH1 南東アゼ	石製品 剥片	最大長 2.75	最大幅 1.4	最大厚 0.4	使用痕あり	－	－	灰黄（2.5Y7/2） 灰（N6/0）暗灰（N3/0）	－	石質：サヌカイト 重量：1.75g

遺構番号	時期	規模（m）		周溝	炉	出土遺物	備考	小地区
		東西	南北					
SH1	古墳前期	7.8	8.1	北・西・南	－	石器・土師器・須恵器	東辺削平・排水溝有	F28～G30
SH2	古墳前期	4.5	5.0	－	焼土複数	土師器		E24～F25
SH3	古墳前期	7.7	7.6	全周	中央に１	石器・土師器・石製品・鉄製品	貯蔵穴・排水溝有	H22～J23
SH4	古墳前期	4.4	4.7	－	－	土師器・焼土塊		H21～I22
SH5	古墳前期？	－	－	－	南寄りに１		柱穴と排水溝のみ	C29～D30
SH6	古墳前期？	－	－	－	－		柱穴と排水溝のみ	H32～I33
SH28	古墳前期	4.3	4.9	全周	中央に１	石器・土師器・焼土塊	貯蔵穴・排水溝有	K17～L17
SH29	古墳前期	3.4	3.9	－	－	土師器	貯蔵穴 SK34 有	L15～M16
SH30	古墳前期	4.9	5.5	－	－	石器・土師器	貯蔵穴 SK36 有	K11～L12

遺構番号	時期	主軸	規模（m）		間数	出土遺物	備考	小地区
			桁行	梁行				
SB7	SH2 より新	N-37°-E	4.4	4.0	2×2		側柱建物	E26・27
SB8		N-38°-W	2.9	2.8	3×2		側柱建物	D24～E25
SB25		N-25°-W	5.2	3.2	3×2		側柱建物	F20～H21

遺構番号	時期	平面形	規模（m）			出土遺物	備考	小地区
			東西	南北	深さ			
SK10		不整形	4.0	2.5	0.5	土師器・須恵器		G32・33
SK11		不整形	1.1	2.5	0.2	土師器・焼土塊		M22
SK13	古墳前期	円形	0.8	0.8	0.1	土師器	SH1 より新	F30
SK14		円形	1.5	0.9	0.3			F30・31
SK15		楕円形	1.0	0.8	0.2			F31
SK17	古墳前期	不整形	1.6	0.8	0.2	土師器		L24
SK18		楕円形	1.0	1.6	0.2			I26
SK19		不整形	1.0	1.7	0.3			I25・J25
SK21		不整形	1.0	2.2	0.4			L26
SK22		不整形	2.2	1.8	0.4			H24
SK23		不整形	0.8	1.8	0.1			G22
SK26		方形	0.8	1.8	0.1			I19
SK27	古墳前期	楕円形	0.9	1.5	0.2	土師器		G19
SK31	近代	長方形	1.6	2.4	0.9		鉄塔基礎坑	I16・17
SK33	近代	楕円形	0.6	1.7	0.3		鉄塔ハンド坑	I17
SK35	古墳前期	不整形	1.8 以上	5.0	0.6	土師器		H16～I17
SK37		円形	1.2	1.4	0.2			M18
SK38	古墳前期	楕円形	1.7 以上	1.6	0.3	土師器		O19
SK39		楕円形	1.2	1.4	0.2			O19
SK40	近代	長方形	1.7	2.5	1.0		鉄塔基礎坑	R6・S6

遺構番号	時期	方向	規模（m）			出土遺物	備考	小地区
			長さ	幅	深さ			
SD12	古墳前期	N-18°-E	11.2	0.2～0.3	0.1	土師器	SH1 排水溝	G30～F32
SD24	古墳前期	N-17°-E	2.1	0.1～0.2	0.1		SH3 排水溝	I24・25
SD32		N-32°-E	6.2	0.4～0.6	0.1			J18～I19

Ⅳ　結語

横谷遺跡の調査で検出された様々な遺構から、遺跡内における集落の動向と、周辺の他の遺跡との関係について考えてみたい。

（１）縄文時代の動向について

本遺跡では、調査前より既に石鏃の出土は知られていたが、具体的な所属時期が不明であった。今回の調査で出土した石鏃はチャート・下呂石・サヌカイト製のもので、いずれも縄文時代に属するものである。合わせて、多数の剥片も出土したことから、当地において一定期間居住し、石器製作も行っていたことが考えられる。ただし、調査では明確に出土遺物から縄文時代のものであると考えられる遺構は確認されていない。縄文時代の遺物の大部分は、古墳時代前期の竪穴住居内から出土したものであり、石質別の数量分布は下記の通りである。

遺構	グリッド	サヌカイト	チャート	下呂石
SH1	F28～30 G28～30	8	4	1
SH3	H22・23 I22・23 J22・23	1	3	0
SH28	K17・18 L16・17	2	0	0
SH30	K11・12 L11・12	1	35	0

第７表　各遺構別石器石材数量表

このように、調査区北部のＳＨ３０において突出した量のチャート剥片が出土していることが注目される。北方及び西方谷地への眺望がきくこの周辺に住居などが存在した可能性がある。

本遺跡の近隣地域では、当該期の明確な遺跡が現段階で確認されておらず、川向山添遺跡の発掘調査でチャート剥片が出土している程度である。今回の調査では住居内の埋土を篩がけすることによりこれらの遺物を確認できたものであり、周辺の遺跡でも調査手法次第で今後確認できる可能性があろう。

（２）古墳時代前期の動向について

横谷遺跡は、『四日市市遺跡地図』(註１)によれば、弥生時代の遺物包含地で、出土遺物として石鏃が挙げられている。今回の発掘調査により、古墳時代前期前半を主体とする集落遺跡であることが明らかとなった。多くの遺構から出土しているＳ字状口縁台付甕を指標とすると、所属時期が明確な遺構は、Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類及びＣ類(註２)の段階のものである。従って、集落の存続期間は古墳時代前期の間で、中期には廃絶していたようである。後期以降は、若干の遺物が確認できるものの、明確な定住の痕跡は見いだせない。

周辺地域の動向に目を向けると、直近では江田川をはさんだ北側丘陵上にある川向山添遺跡の平成 28 年度に行った発掘調査で、受口甕の口縁部が出土している。さらに視野を広げると、本遺跡の東方１ km の海蔵川左岸には弥生時代とされる四ツ谷遺跡がある。しかし、出土遺物の存在は明らかではなく、実態も不明であるとされている(註3)。

第 18 図 横谷遺跡周辺遺跡位置図（1：50,000）

四ツ谷遺跡の南側 500mの海蔵川右岸台地上には、弥生時代前期～後期及び古墳時代後期を中心とする大谷遺跡（註4）があり、こちらと同時期に存在した集落の可能性がある。さらに海蔵川を2km ほど下った左岸には、弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡である上野遺跡（註5）がある。

横谷遺跡とこれらの遺跡が、弥生～古墳前期にかけての海蔵川中下流域における集落群としてみることができるだろう。横谷遺跡は、その中でも海蔵川から外れた奥まった位置にあり、眺望や水利を考えても良好な立地とはいい難い。集落としての存続期間が、他の周辺遺跡と比較すると短期間であったのもそうした理由によるものではないかと考えられる。

今後、川向山添遺跡・江田川遺跡をはじめとする周辺遺跡から当該期の遺構・遺物が出土する可能性は十分あるので、今後の調査に期待したい。

【註】

① 四日市市教育委員会『四日市市遺跡地図　改訂版』1994

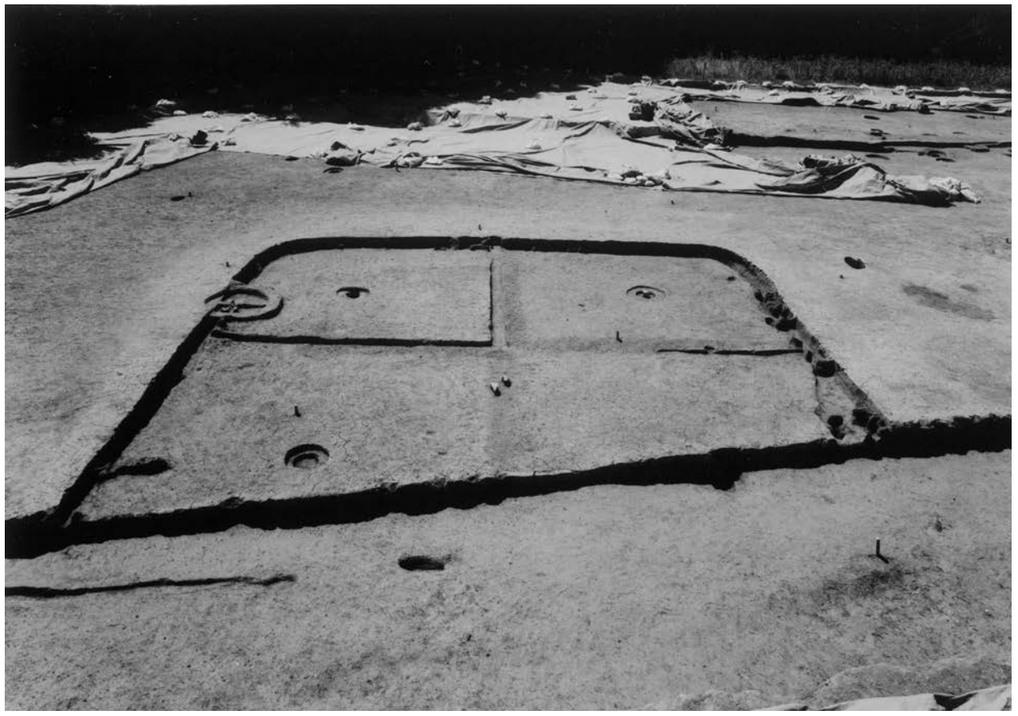
② 穂積裕昌「第３節　弥生後期～古墳時代土師器の型式分類」『六大Ａ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002

③ 四日市市『四日市市史　第二巻　史料編考古Ⅰ』1988

④ 四日市市教育委員会『大谷遺跡発掘調査報告－Ａ地区、Ｂ地区－』1966
四日市市教育委員会『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ－Ｃ地区の遺構－』1976
四日市市教育委員会『大谷遺跡発掘調査報告Ⅲ－Ｃ地区の遺物－』1977

⑤ 四日市市遺跡調査会『上野遺跡』1991
四日市市遺跡調査会『上野遺跡２』1992

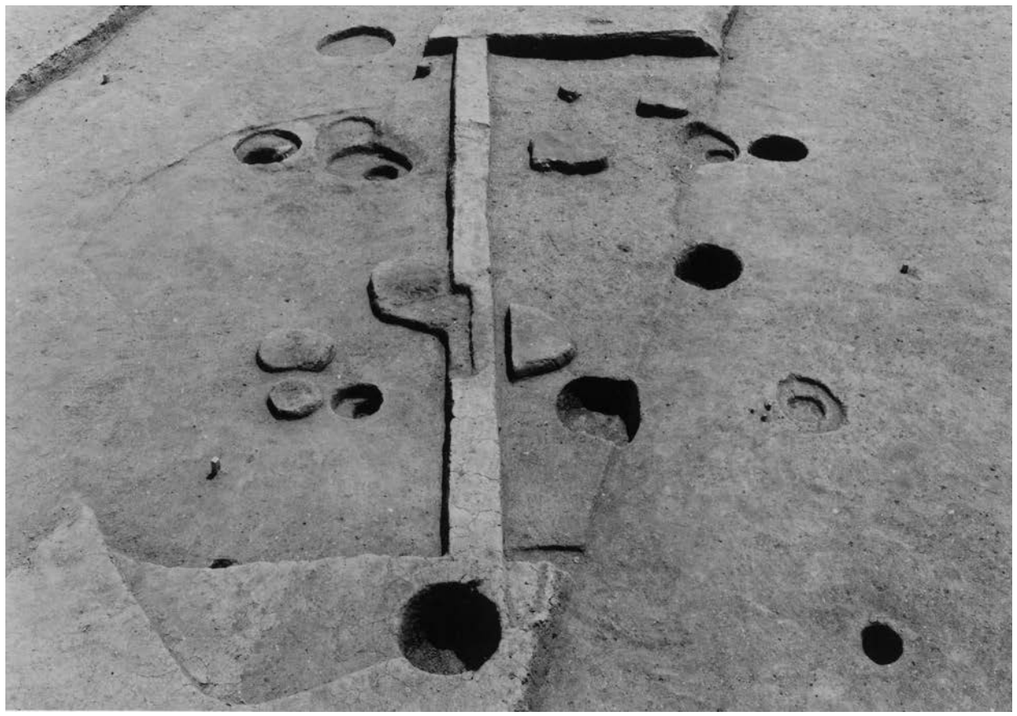
図版１



ＳＨ１全景（東から）

ＳＨ１全景（北から）

図版２



ＳＨ２全景（北から）

ＳＨ３全景（東から）

図版３

ＳＨ５全景（北から）

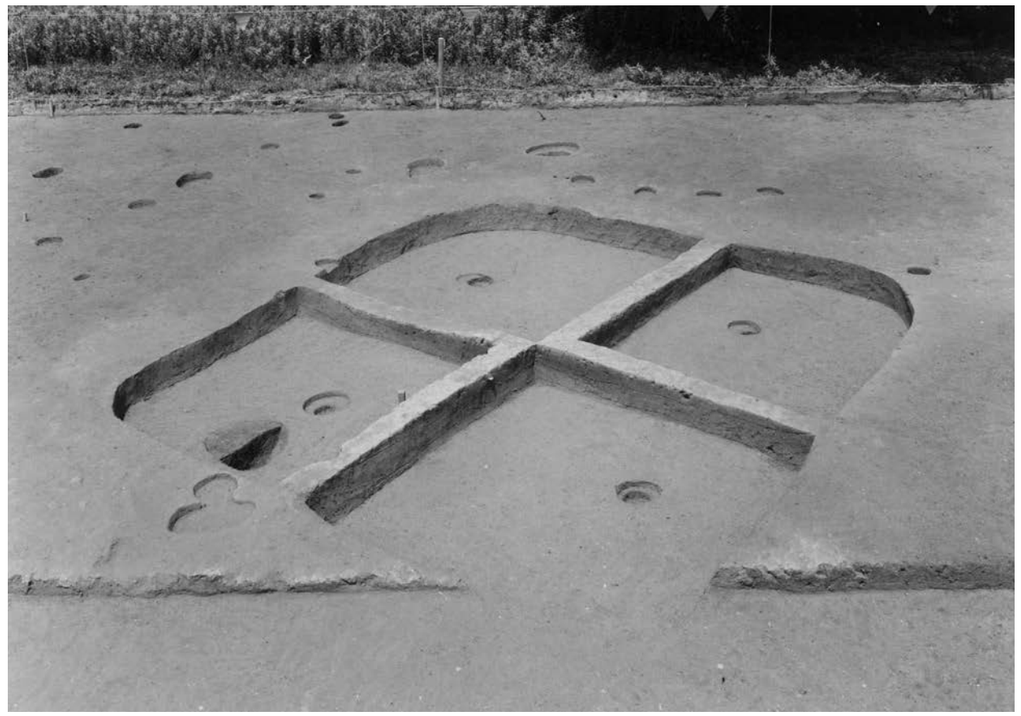
ＳＨ６全景（北から）

図版４

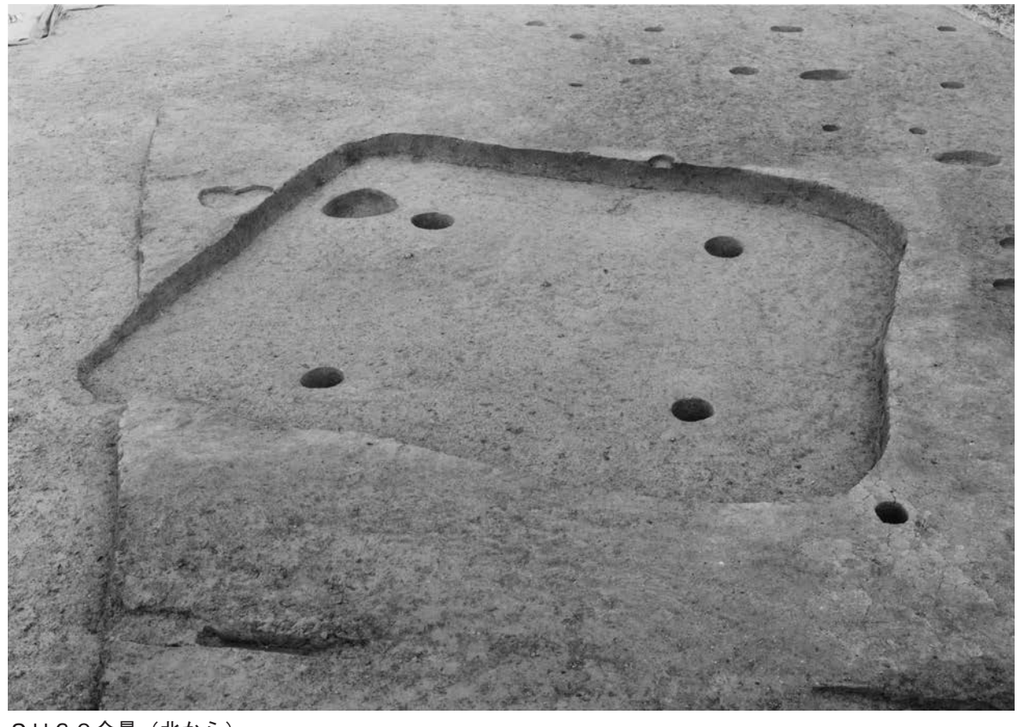
ＳＨ２８全景（北東から）

ＳＨ２８全景（北から）

図版５

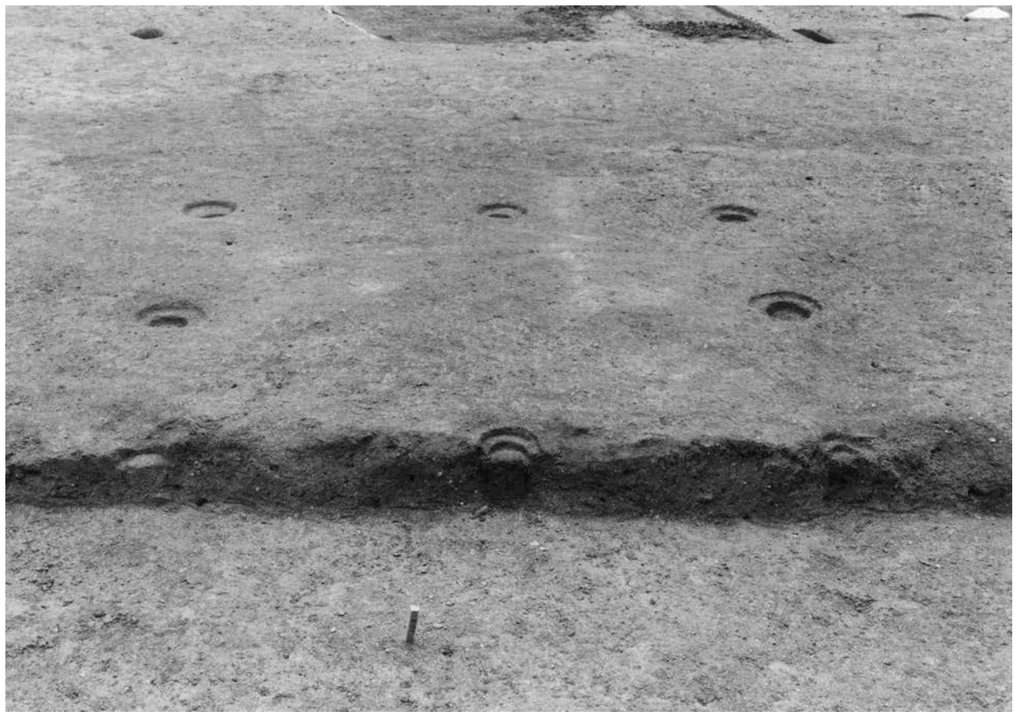


ＳＨ３０全景（東から）



ＳＨ３０全景（北から）

図版６

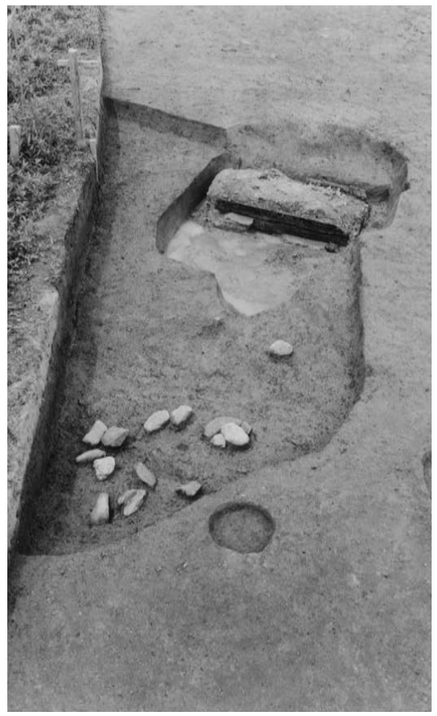


ＳＢ７全景（北西から）

ＳＢ８全景（北東から）

図版７

ＳＢ２５全景（北東から）



ＳＫ３５・ＳＫ３１全景（南から）

ＳＫ３５・ＳＫ３１全景（東から）

図版８

ＳＫ２７遺物出土状況（南西から）

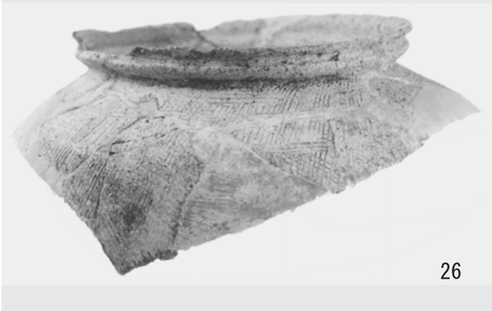
ＳＫ３８全景（西から）

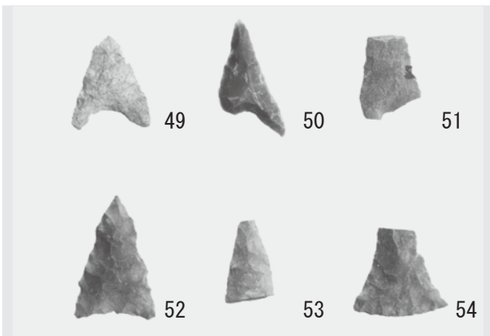
図版９

調査区南部全景（北から）

調査区中央部遺構群（南から）

図版１０





出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどういちごうほくせいばいぱすけんせつじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはっつちょうさほうこくＶ　よこだにいせき
書名	一般国道１号北勢バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　Ｖ
シリーズ名	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	56
編著者名	山本達也
編集機関	四日市市教育委員会
所在地	〒510-8601　三重県四日市市諏訪町１番５号　℡059-354-8240
発行年月日	2021（令和３）年３月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
横谷遺跡（よこだにいせき）	四日市市（よっかいちし）西坂部町（にしさかべちょ）	24202	120	34° 59′ 47″	136° 34′ 45″	20170516 ～ 20170831	4,092	一般国道１号北勢バイパス建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横谷遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・石器	古墳時代前期の竪穴住居を９棟検出した。

要約	横谷遺跡は、江田川右岸の丘陵北端に立地する弥生時代の遺跡として把握されている。調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居と掘立柱建物及び土坑を検出した。主な遺物としては、S字状口縁台付甕をはじめとする多数の土師器がある。このほか、少量の古墳時代後期の須恵器や、縄文時代の石鏃・剥片も出土した。

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書56

横谷遺跡

2021年（令和３年）３月
編集・発行　四日市市教育委員会
印 刷　　畠　　山　　印　　刷